

## 『岩村高俊自傳草稿』の翻刻と解題

磯 貝 幸 彦  
古 山 悟 由

## はじめに

歴史史料に於ける「自伝・回想録」類の史料的価値は、一次史料に劣るとはいえ、一次史料では知り得ない多くの情報を有している。しかしながら、これらの史料は公刊されることが少なく、また公刊されても小部数であったり、非売品であったりすることが多い。今回、翻刻・紹介する『岩村高俊自傳草稿』（以下『草稿』と略す）も昭和三十（一九五五）年に岩村の三男である平井金三郎氏により『戻橋堂主人自傳』として活字化されたものがある。この『戻橋堂主人自傳』と『草稿』との間には字句の違いがあり、また数カ所の脱漏等が『戻橋堂主人自傳』にみられ、『草稿』により補うことが可能である。また『戻橋堂主人自傳』は漢字平仮名混じりの文章であるが、『草稿』は漢字片仮名混じりの文章である。

## 一 岩村高俊の生涯

## (一) 略 歴

岩村高俊は弘化二（一八四五）年十一月十日、土佐国幡多郡宿毛に生まれ、明治三十九（一九〇六）年一月二日没。享年六十二歳であつた。岩村家は、土佐藩山内家の家老伊賀氏の家臣の家柄であり、高俊は岩村英俊の三男として生まれた。長兄は後の初代北海道長官岩村通俊、次兄は自由民権運動家として知られる林有造である。

慶応三（一八六七）年九月兄通俊の鉄砲買い付けに同行し長崎に向かい、そこで藩の監察佐佐木高行の添書きを得て、中岡慎太郎の陸援隊に加入するため上京した。上京後は、侍従鷲尾隆聚の高野山出兵に従い、戊辰戦争では「東征軍」の東山道先鋒総督府監察兼応接掛を勤め、のち軍監として活躍する。この時の北越戦争に於ける長岡藩の家老河井継之助との「小千谷談判」は有名である。明治二（一八六九）年に軍功により永世録高二〇〇石を受けた。その後、新潟府権判事心得・兵部省糾問大佑・有栖川宮家家令・宇都宮県権参事・神奈川県権参事を歴任し、明治七（一八七四）年の「佐賀の乱」では、兄通俊に代わって佐賀県権令となり、その鎮定に努めた。「佐賀の乱」後は内務省に転任し、全権弁理大臣大久保利通の随員として井上毅と共に清国に赴いた。帰国後の明治七（一八七四）年十一月愛媛県権令となり、明治十一（一八七八）年初代の愛媛県令となった。明治十三（一八八〇）年三月に内務省大書記官となり、九月には沖縄視察を行った。明治十六（一八八三）年には石川県令となり、その後は石川県知事（府県制公布に伴い）・愛知・福岡・広島県知事を歴任し、明治三十一（一八九八）年七月二十八日病により広島県知事を依願免官となった。この間明治二十五（一八九二）年貴族院議員に勅撰され、明治二十九（一八九六）年には男爵の爵位を受けた。晩年は京都一条堀川に隠退して戻橋堂と称し、年一回の議会開会中は上京し、兄通俊の家から議会に通つたという。

## (二) 「小千谷談判」と「佐賀の乱」

岩村の前半生のうち、注目されるのは戊辰戦争に於ける「小千谷談判」の決裂と、江藤新平の「佐賀の乱」における対応である。

「小千谷談判」について岩村は、河井の嘆願に対し『草稿』において「其藩擧テ朝敵。余等朝敵追討ノ命ヲ受ク、其他ヲ知ラス、汝今言ヲ左右ニ託シ、日ヲ藉リ謀ヲ為サントス、余等不肖ト雖トモ、未タ其術中ニ陥ラス、汝速カニ歸リ兵備ヲ収メ、官軍ノ至ルヲ待テ、他日兵馬ノ間ニ相見ント座ヲ蹴ツテ起テ、四人齊シク營ニ歸ル。河合失望營門ニ未リ、面接ヲ請フ事再三夜ヲ徹ス。遂ニ許サス、河合長岡ニ歸ル。」と記しているが、後年の追懐談では「余此の時僅に二十三歳、血氣盛んに、且つ河井の人物経歴は、今に至りて漸く知る所にして、當時固より之を知らん由もなし。封建時代の常として、各藩の重役等は皆藩の門閥家のみ、所謂馬鹿家老たる習ひなれば、現に余に随行せる信州各藩の重役等の如く、河井も亦尋常一様の門閥家老に過ぎざるべしと推察したり。(後略)」と答えている。これらの岩村の行動は後に多くの非難を浴びることとなった。

明治七(一八七四)年に起こった「佐賀の乱」では長兄の通俊に代わって佐賀県権令となり熊本鎮台の兵と共に佐賀に入り鎮定に当たった。この時、通俊は高俊に対し「方今ノ形勢ヲ視ルニ薩摩ニ西郷、山口ニ前原、佐賀ニ江藤等アリ、皆ナ政府ニ反抗シ危機且夕ニ逼マレルカ如シ。察スルニ佐賀ハ他ニ先ンシ事ヲ擧ン。兄ハ他ニ思フ處アリ、汝我ニ代リ佐賀ニ趣カスヤ。汝若シ之ヲ諾セハ兄將サニ政府ニ請フ所アル可シト(後略)」と語ったと言い、内務卿大久保利通に後任として推薦している。それに対し次兄の林有造は『林有造氏舊夢談』において「(前略)此夜江藤氏余の寓に來りて曰く、只今島義勇着港せり、岩村高俊君佐賀縣令の職を奉じ、外國郵船にて馬關に上陸、直ちに熊本鎮臺の兵を卒る將さに我縣に入らんとす、高俊君は即ち貴君の令弟なりと。余聲を勵まして曰く、兄弟固より其心事を異にす、君決して疑ふこと勿れ、男兒大事を企つ、豈に兄弟の親を答ふに暇あらんや、唯地方長官にして兵隊を任地に引卒す、是れ何の道理ぞ、縣民令に悖らば始て政府に具申して陸軍省の指揮を待て之を征討すべし。而して弟高俊の舉動今ま此の如し、天下識者の笑は尚ほ忍ぶべし、獨り外國の輕侮を奈何せん、然れど彼は戊辰の役に於て軍事の經驗あり、若し戦争とならば侮るべからず。(後略)」と高俊の行動を非難しており、この時期の両者の立場が明確

に顕れている。

### (三) 愛媛県権令時代

初代愛媛県権令となった岩村は積極的に旧藩士族を登用し、また民権結社「公共社」を主宰していた長屋忠明なども積極的に抜擢していくなど「民権権令・平民長官」などとうたわれた。この愛媛県に於ける岩村の県政は、今日でも一定の評価を得て要るものの『草稿』にはそれほど深く触れられていない。

末広鉄腸はこの当時の岩村を「岩村君ノ其ノ徳望ヲ人民ニ得タルモノハ他ニ非ス、其ノ施政ノ大着眼ヲ誤ラス、人民ノ志望ニ従フテ民政ノ方向ヲ立ルニ因レリ」と評した。

### (四) 愛媛県権令時代以降

明治十三(一八八〇)年三月に内務省大書記官として転出し、その後各地の県知事を歴任したものの石川県知事として積極的な県政を展開した以外取り立てて見るべきものがないようである。これは中央集権国家としての日本が成立していく時期に丁度当たっている。明治七(一八七四)年共に清国に赴いた井上毅が後に中央官僚として成功したのに対して岩村はその生涯の大部分を地方長官として過ごしたのである。

### 二 『岩村高俊自傳草稿』の諸本について

現在、岩村の自伝で管見に入ったものはつぎの四点である。

(一) 活字本

(二) 慈眼寺蔵本

(三) 五井家蔵本

(四) 國學院大學図書館蔵本

(一) 活字本

前述したように岩村の三男である平井金三郎氏により刊行されたものである。書名は『辰橋堂主人自傳』。奥付には「昭和二十九年十二月二十五日印刷／昭和三十年一月二日発行／非売品／編者平井金三郎／印刷一燈園印刷部／京都・山科」とあり、岩村の五十回忌の記念として刊行したものと考えられる。編者の平井金三郎氏のまえがき、徳富蘇峰の『近世日本国民史 北越戦争篇』中の岩村高俊追懷談、岩村圓氏の覚書、慈眼寺沿革等が付載されている。

(二) 慈眼寺蔵本

本書は一般によく知られている写本であり、早く戦前に岩村家より佩刀、古文書数通と共に北越戦争時の小千谷会谈の場であった、慈眼寺に寄贈されたものである。漢字片仮名混じり、十行十六字詰。自伝巻頭から「同年四月七日二男圓生ル」（翻刻九七頁）までの写本。

(三) 五井家蔵本

小千谷市の五井家に岩村家より辞令、自歴、家譜、書簡(岩村宛)等とともに寄贈された写本。『自傳草稿 第貳』(A本)・『自傳草稿 第參』(B本)・『自傳草稿 第參』(C本)の三冊がある。A本は「明治二年己巳歲」(翻刻九一頁)から「原亮三郎二讓ル」(翻刻一〇三頁)まで、B本は「同年九月十一日沖繩縣出張」(翻刻一〇三頁)から「山縣侯入りテ内閣ヲ組織ス」(翻刻一二一頁)まで、C本は、「發狂縊死スルモノ」(翻刻一〇五頁)から「大日本水産會綠色有功章ヲ贈與シテ其ノ功勞ヲ表彰ス。」(翻刻一一九頁)までの写本。

A本及びB本の途中までは、五行（十行罫に一行置き）十八字詰。それ以降は、二十〜三十字詰。C本は、十行二十一〜二十三字詰。

A本には「○、上、消し」等の指示が付記されている。

### 三 『岩村高俊自傳草稿』の諸本と國學院大學図書館蔵本

活字本の巻末に付載されている岩村の次男岩村圓氏の文章によれば、一時期この『岩村高俊自傳草稿』は田中光顕の許にあり、その後岩村家に戻った。その時、田中光顕の忠告により岩村圓の手によりその副本が作成されたと言う。この時の『自傳草稿』原本は、美濃判罫紙に十行十八字詰に漢字片仮名混じりで書いてあったと言う。いま管見に入った諸本のうち五井家本と國學院本が十行十八字詰であり（但し、五井家本は上述のとおり、一行置き）慈眼寺本は十六字詰である。

次に昭和八（一九三三）年岩村博氏が高松宮の御覽にいらした『自傳草稿』がある。この時の『自傳草稿』の一部が、昭和十（一九三六）年刊行の『伊予史談』（第二十二巻第一号）に『岩村愛媛縣令自傳』として活字化されているが、この文章の内容と活字本・國學院本との内容が異なっている。たとえば、活字本・國學院本の『草稿第一』の巻末は共に「舊幕領川之江等ナリ。」（翻刻二二頁）で終わっているが、『岩村愛媛縣令自傳』ではその次に「是レヨリ先キ、参事江木康直、七等出仕大久保親彦ト意相合ハズ、廳中自カラ派ヲ爲シ、相凌轢ス、江木没スルニ及ンデ親彦ノ黨志ヲ得、頗ル隱當ヲ缺ク、依ツテ状ヲ具シ親彦ノ官ヲ免ジ、又屬吏二三ヲ罷メ廳内平安ニ歸ス」と言う文章が存在している。この文章は、五井家本（A本）には存在しているのである。ただし、五井家本（A本）にはこの文章のまえに「沿岸殆ント一百里トス」と言う一文があり、「消シ」の指示がされている。このことにより、『伊予史談』に活字化された写本が存在することがわかる。以上により、國學院本は『自傳草稿』の写本の一つであり、他に写本の存在する可能性がある。また國學院本には巻末に五丁にわたって岩村高俊の維新東北戦争・佐賀の乱・伊予讃岐両国改租・石川県の恐慌に関する梗概が附されている。

諸本の調査に関しては短期日のうちに行ない、細部に関する調査を行っていない。各諸本間の異同等については後日改めて報告したい。

尚、五井家本及び慈眼寺本は新潟県立文書館所蔵の写真フィルムに拠った。

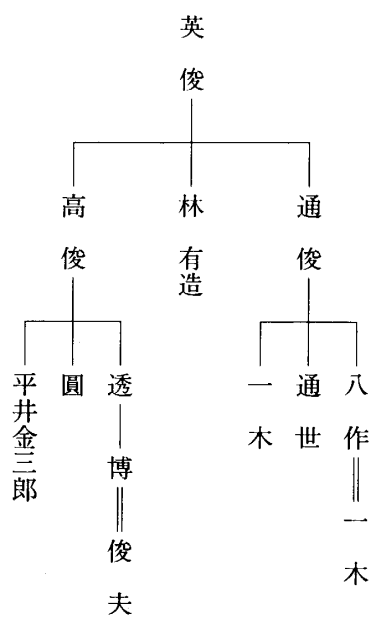
#### 四 『岩村高俊自傳草稿』（國學院大學図書館蔵本）の書誌について

- ・ 四ツ目袋綴一冊
- ・ 表紙菱繋ぎ菊花織文
- ・ 題簽書名『岩村高俊自傳草稿』（徳富蘇峰自筆墨書）
- ・ 内題書名『自傳草稿 壹（貳）』
- ・ 徳富蘇峰読後感「奉公偉蹟明ニ昭ニ煌ニ／赫ニ顕榮崇達非偶然也／昭和丁丑六月十六日／蘇峰一讀／誌感（印記 二顆）」
- ・ 石川岩吉添書「昭和八年十月十一日／高松宮御邸に於て男爵岩村博氏／拜謁の際持参せる亡祖父高俊翁の自傳／稿本を 御覽に供へ奉る／宮は親しく其の稿本を繕かせられ翁が／明治初年有栖川宮家令に任ぜられし／記事を始として其の経歴中重要な／國事に関するもの佐賀の乱の部分など／数箇處に 御目を留めさせられたり／男感激して予に其の事実の記述を／請はる即ち書して之を贈る／高松宮附別當石川岩吉」
- ・ 縦 二十三・六糎 横 十五・九糎
- ・ 墨付 第壹（五十九丁）・第貳（五十八丁・五丁）
- ・ 原稿用紙 東京榛原製

参考文献

- ・『愛媛県史 県政』 (愛媛県 昭和六十三年刊)
- ・『新潟県史 別編2』 (新潟県 平成元年刊)
- ・『小千谷市史 下』 (小千谷市 昭和四十二年刊)
- ・『明治文化全集22』 (日本評論社 昭和四年刊)
- ・『貫堂存稿』 (岩村一水 昭和九年重刻)
- ・『愛媛近代史研究3』 (近代史文庫 昭和三十八年刊)
- ・『河井継之助伝』 (復刻版) (今泉鐸次郎著 象山社 昭和五十五年刊)
- ・『辰橋堂主人自傳』 (平井金三郎 昭和三十年刊)

(付) 岩村家略系図





凡  
例

- 一 翻刻の底本は國學院大学図書館所蔵『岩村高俊自傳草稿』（請求番号 貴一一九八）に拠った。
- 一 翻刻に際しては底本に使用せる誤字・脱字・宛字等は略々底本の文字の通りとした。
- 一 翻刻に当たっては句読点は読者の便宜を考慮して編者が適宜これを施した。
- 一 底本からの翻字は磯貝幸彦が担当し、解題は古山悟由が担当した。

# 岩村高俊自傳草稿

岩 村 高 俊

## 自傳草稿 壹

左ニ掲クル書ハ嚴父英俊翁ノ自筆、高俊行狀記ト題スル者之ヲ自傳ノ首メニ載ス。

岩村高俊ハ英俊ノ三男ナリ。弘化二年乙巳十一月十日土佐國幡多郡宿毛村ニ生ル。母ハ小野善次郎義質ノ女ナリ。初メ鉄五郎ト稱ス。十歳ノ春習字讀書ヲ酒井三治ニ學フ、十三歳ノ春ニ至リ北條氏ノ兵法ヲ余自カラ教授ス。性質柔弱常ニ筋ヲ引クノ病アリ、母之ヲ憂エ神ニ祈リ、名ヲ精一郎ト改ム。

萬延元年九月、余カ伊豫國宇和嶋ノ醫師布清恭ノ家ニ病ヲ養フノ時、次男祐次ト共ニ宇和嶋ニ來ル。祐次先ツ歸リ、精一郎ヲ留メテ大野昌三郎ノ門ニ入レ洋學ヲ學ハシム。明春入塾セシムルヲ約シ、同年十月與ニ國ニ歸ル。文久ノ初メヨリ五、六年間洋

學ハ細川潤次郎ニ、西洋兵學ハ吉村賢次郎、宮地左仲等ニ就テ學ハシム。元治二年五月吉村賢次郎ヨリ高嶋流砲術皆傳免許ヲ得タリ。此ニ於テ舊主家ノ砲術教師ヲ命セラル。門弟數十人アリ。

此ノ時ニ方リ薩長ノ二藩大ニ勤王攘夷ノ論ヲ唱フ。本藩士武市半平太<sup>瑞山</sup>江戸ヨリ歸リ、國君ニ建白シ、同盟國是ヲ定メントス。樋口真吉中村ニアリテ主唱者タリ。樋口一日余カ家ニ來リ説テ曰ク、長州ノ藩士久坂玄瑞、高杉晋作、薩州西郷吉之助、大久保一藏等其他天下ノ志士相結托大ニ勤王攘夷ノ大義ヲ唱フ。君カ主家ハ國ノ門地、進シテ我國ノ盟主タラシメヨト。此ノ時國論党派ヲ分チ大ニ乱レ諫死、脱走、繫獄ノ士少ナカラス、實ニ浩嘆ニ堪エサルナリ。

伯左内<sup>通俊</sup>仲有造<sup>直包</sup>叔精一郎<sup>高俊</sup>三兒共ニ東奔西馳、王事ニ勤ム。一日精一郎余ニ請フテ曰ク、方今ノ形勢、勤王家幕府ノ重臣ヲ刺シ、且ツ幕府ニ迫ルニ攘夷ノ大事ヲ以テス。四夷猖獗實ニ内外多事ノ日ナリ、有志ノ士、身ヲ安ンスルノ時ニ非ス。速ニ都下ニ出、能ク其ノ形勢ヲ觀察シ、大ニ王事ニ命ヲ致スノ時ナリ。今、膝下ヲ離ル其孝ヲ欠クト雖トモ願クハ兒ニ數年ノ暇ヲ賜ハル可シト、余大ニ歎賞シテ曰ク、其志甚タ善シ、主君ニ請ヒ速ニ旅裝ヲ整エヨト、高俊欣然トシテ退ク。

#### 以下高俊自記

余十五六歳ノ時、國府有志ノ士、勤王攘夷ノ説ヲ唱エ國君ニ諫争シ屠腹或ハ脱藩シ、又、或ハ獄ニ繫カル、者少カラシテ一藩擾乱ス。是レ全ク國是定マラサルヲ以テナリ、豈ニ慨歎ニ勝エサル可ケンヤ。

家大兄左内君同藩士武市半平太<sup>瑞山</sup>ノ輩ト同心戮力、密カニ國事ニ盡ス所アリ。余モ亦慷慨ノ志ナキニ非ス。顧フニ我カ國邊境、人心モ亦頑固ナリ。今ノ時ニ方リ廣ク天下ノ士ニ交リ、時勢ノ向フ處ヲ察シ、機ヲ見テ而シテ動クニ如スト、其ノ志決スト雖トモ未タ果サス。

慶應三年丁卯、家大兄左内君主命ヲ以テ長崎ニ行カントス。断然意ヲ決シ、家兄ニ從ハン事ヲ父母ニ請フ、許サル。則チ西洋兵學ヲ修ムルヲ名トシ、暇ヲ乞ヒ左内君ト俱ニ郷里宿毛ヲ發ス。實ニ慶應三丁卯ノ年九月二十六日ナリ。齊原治一郎<sup>中左</sup>左内君ニ從フ。同行三人同志朋友未送スル者、國境松尾坂ニ至ル。是レト相別レ此ノ日豫州宇和嶋領城邊村里正、矢野安藝三郎ノ家ニ宿

ス。翌日発途海岸通之ヲ濱街道ト云、柏阪ノ險アリ、夕陽宇和嶋ニ着ス。同處ヨリ八幡濱ニ渡ラントシ乗船ス。夜中俄然風雨起  
 リ船ヲ洪上ニ繫キ風波ノ定マルヲ待ツ。余上陸是ヨリ陸路八幡濱ニ至ル。里程ヲ土人ニ問フ三里ト云フ、之ヲ左内君ニ告ケ陸路  
 八幡濱ニ達ス。居ル事一日八幡濱ヲ出船シ左田ノ邊リニ到ル時、風止ミ船動カス、黄昏左田ノ港ニ入り風ノ起ルヲ待ツ。余船ニ  
 慣レス苦悶甚シ、翌日快晴順風一帆豊後佐賀ノ關ニ達ス。同處ヨリ上陸、鶴崎坂梨ヲ經テ初メテ阿蘇山ヲ見ル。夫レヨリ熊本嶋  
 原等ヲ過キ長崎ニ着ス。左内君同藩大石某ヲ訪問ス、余等大根屋ニ宿ス。大谷義庵外二三輩同宿ス。旧友萩原三圭未リ一酌三更  
 寢ニ就ク。翌日港内市街ヲ散步ス。外人ノ居留地ニ至リ見ルモノ皆ナ新奇、眼ヲ驚カセリ。日ヲ經テ西洋兵學家、中嶋某ヲ師ト  
 シ學フ後チ數日左内君主用ヲ辨了シ浪華ニ上ラントシ乗船ス。之ヲ港口ニ送り別袂齊原モ亦長崎ニ留マル。是ヨリ先キ佐々木三  
 四郎高行藩ノ大監察ヲ以テ長崎ニ在リ、晏氏ノ旅寓ヲ訪ヒ上國ノ形勢ヲ聴ク。一日徳川慶喜大政返上將軍職ヲ辞スルノ表ヲ奉ルト  
 聞ク。依テ急ニ佐々木ヲ訪フ。佐々木曰ク、昨日海援隊中嶋作太郎信行上國ヨリ歸ル。快報三アリ、其一ハ藩主容堂公幕府エノ建  
 白書、其二ハ慶喜大政返上ノ表、其三ハ朝廷允許ノ御沙汰書是レナリト、則チ出シテ余ニ示ス。其他薩長間ノ消息等其報知頗ル  
 精確。皇運挽回ノ吉端ナリト一坐眉ヲ開ク、余即チ旅舎ニ歸リ静思熟慮天下ノ形勢已ニ斯クノ如シ、速ニ京師ニ趣キ事ヲ謀ルニ  
 如スト、又、佐々木ヲ叩キ之ヲ計ル。佐々木曰ク、善シ、今中岡慎太郎石川清之助之京都土佐白河邸ニ在リテ有志ノ士ヲ集メ一隊ヲ爲ス、  
 名ケテ陸援隊ト稱ス。我レ中岡ニ添書セン、行テ暫ク其形勢ヲ見ル可シト、余決然歸舎之ヲ齊原ニ告ク、氏モ亦俱ニ上國ニ行カ  
 ント欲ス。近日我カ帆前横笛号長崎ヲ発シ兵庫ニ航セントシ、中嶋作太郎信行石田英吉ノ両士乗船上京ス、齊原是レニ便乘ス。余  
 ハ陸行シテ筑前太宰府ニ至リ三條公等ニ謁シ、且ツ同藩士ノ太宰府ニ在ル者ヲ問ハントス。慶應三年十一月七日獨歩長崎ヲ発ス、  
 翌日諫早ヨリ乗船ス。此ノ渡海船ハ丸木舟トテ一種異様ノ工造ナリ。舟中陝隘、客十二人一タヒ坐スレハ屈伸便ヲ得ス、其不自  
 由謂フ可カラス、一夜ニシテ肥前本庄ニ着ス。是レヨリ上陸佐賀城ヲ過キ筑前太宰府ニ達ス。此時九州地方浮浪ノ徒徘徊、宿駅  
 獨客ヲ止メス、毎ニ里正ニ請フテ宿ヲ求ム。余出國ノ時切符ヲ帶ヒス一トシテ其証ナシ、里正或ハ關吏ヲ欺キ辛フシテ通行スル  
 ヲ得タリ。太宰府ニ達スルヤ直ニ清岡半四郎弘張ヲ問フ、病床ニ在リ緩談數時猶ホ上國ノ形勢ヲ審カニセリ。三條公ニ謁セン事ヲ  
 乞フ、公近時病アリ、謁スル事ヲ得ス。詠詩ヲ賜フ、即チ壬生卿ニ謁ス。此ノ夜五卿ニ從フノ士數輩ト昔公ノ廟前ニ小宴ヲ催ス、

時事ヲ談論シ痛飲徹霄大ニ愉快ヲ覺フ。條公隨從ノ士南部静太郎號余ヲ送ル詩アリ。

同國不知異境逢 遇離不累丈夫胸

他日相合復何地 白雪寒風比叡峰

翌日清岡ヲ訪ヒ再會ヲ約シテ去ル。太宰府ヲ發スル時數士郊外ニ未送ス。之ト別袂孤身間歩、或ハ商估ト伴ヒ、或ハ神佛ニ詣ツル者ト道ヲ同クス。半日ニシテ分レ、或ハ終日放談逸話逆旅ノ境界モ亦妙味アリ。太宰府ヲ發シ豊前小倉ニ至ル。曩日長藩ト戦ヒ郭内盡ク焼ク、今猶ホ荒亡昔日ノ觀ナシ、真ニ憫ム可キナリ。長藩吏ヲ出シ民政ヲ管理ス、又筑豊ノ境長州ノ關門アリ、今長藩ノ有タリト覺フ。小倉城外橋本ヨリ乘船長州下ノ關ニ渡ル、三里ノ海上一時ニシテ達ス。長崎ヲ發セシ帆前船横笛号已ニ未リ繫泊ス。石田・中嶋ヲ稻荷町大坂屋ニ問フ、齊原モ亦坐ニ在リ横笛号明日出船スト、余モ亦是レニ投セン事ヲ約シ、其夜共ニ大坂屋ニ宿ス。翌日齊原ト相伴ヒ招魂所ニ至リ、戦死諸士ノ墓前ニ詣テ、其日午后横笛号ニ乗ル。西洋式航海ハ之ヲ初トス、乗船兩三日波濤枕ニ響キ眠成ラス、昼夜甲板上ニ徘徊ス。日ヲ経テ其憂ヲ忘ル、船馬關ヲ發シ海上七日兵庫港ニ入ル。同藩士大石某京師ヨリ長崎ニ行カントシテ兵庫ニ在リ、本月十五日ノ夜坂本龍馬・中岡慎太郎ノ兩士幕府新撰組ノ手ニ斃レタリトノ凶變ヲ聞ク。一坐愕然痛嘆限リナシ。余等中嶋・齊原ト共ニ兵庫ヲ出帆ス。石田兵庫ニ留ル、其夜大坂ニ着シ、土佐堀薩摩屋ニ宿ス。小野淳助ニ會シ坂本・中岡兩士遭難ノ事實ヲ詳カニセリ。道頓堀宿毛邸ニ至リ從弟立田強一郎號等ニ面ス。三條公賜フ處ノ短冊ヲ家翁ニ贈呈ス。大坂ニ留ル事一日淀川ヲ溯リ一睡中伏見ニ着ス。大佛屋ニ一休、竹田街道京師ニ入り河原町三條下ル醉屋ニ宿ス。陸奥陽之助光、關斧之助等ニ會ス、皆ナ海援隊ノ人ナリ。坂本・中岡害ニ遭ヒ各自其方向ニ惑フ、余モ亦佐々木トノ計議空シク去リ大ニ自失ス。中岡逝クノ後千大橋深藏・田中顯介光陸援隊ヲ卒ヒ依然白河邸ニ在リ。之レニ投セントシ中嶋作太郎信・齊原・余ト共ニ白河邸ニ至リ、大橋深藏・田中顯介光等ニ面シ前意ヲ通ス、兩士諾ス。中嶋去ル、余等同邸ニ留リ長崎太宰府等ノ近狀ヲ語り、且ツ佐々木ヨリ中岡ニ致ス所ノ書ヲ示シ以テ初志ヲ明カニス。兩士交近時ノ狀勢ヲ述ヘ且ツ曰ク、近日一大快事發セント、依ツテ我カ坂本・中岡等岩倉公及ヒ薩長二藩ノ間ニ周旋畫策スル處ノ大意ヲ得タリ。初メテ岩倉公ノ英名ヲ聞ク、是レヨリ常ニ白河邸ニ寓シ諸有志ト交リ時事ヲ談論ス。一日中嶋作太郎信来リ兵庫ニ在ル石田英吉ニ坂本ノ事跡ヲ告ケン爲メ兵庫ニ下ラ

ントス。同行ヲ余ニ求ム、即日出發伏見乗船大坂ニ着シ陸地尼ヶ崎西ノ宮等ヲ經、楠公ノ墓前ニ拜シ兵庫ニ着ス。石田未リ談話夜ヲ徹ス、翌日兵庫ヲ發シ再ヒ上京ス。中嶋兵庫ニ留マル。京師ニ着シ又白河邸ニ入ル。形勢日ニ逼リ天下ノ大事將サニ起ラントス。近日會津・桑名其他佐幕ノ諸侯入京ヲ禁シ、徳川ヲシテ諸侯ノ列ニ下サン事廟議密カニ決ス。事茲ニ至ラハ彼レ必スヤ兵端ヲ開ク可シ。此ノ時ニ方リ我カ陸援隊鷲尾卿ヲ奉シ高野山ニ籠居シ、以テ紀藩ヲケン制シ京師に聲援ヲ爲サントス。其策既ニ決ス。衆皆ナ口ヲ掩ヒ日ノ定マルヲ待ツ。十二月七日ノ夜紀州藩士三浦久太郎<sup>安</sup>ヲ刺スノ事アリ略ス。

大政改革ノ大事十二月九日ヲ以テ發セントス。我カ陸援隊鷲尾卿ヲ奉シ十二月八日ヲ以テ京師ヲ發シ南山ニ向フニ決ス。衆皆ナ奮然專ラ其準備ヲ爲ス、日至ル。初更白河邸ヲ發ス、京師ヲ出ツルノ時三々五々伏見ニ於テ合ス。曉前鷲尾伏見ニ着セラル、人員合シ百有餘伏見乗船、九日薄暮大坂八軒屋ニ着シ、上陸住吉ヲ過キ堺駅ニ至リ宿ス。十日堺ヲ發シ三日市駅ニ宿ス。此ニ於テ役員ヲ定メ隊伍ヲ整フ、鷲尾卿ヲ輔ケ、一行ヲ監督スル者四名、曰ク大橋深藏・田中顯介<sup>光</sup>・香川敬三・前田雅樂其他監察斥候等ノ名アリ。十一日加武呂駅ニ宿ス、此ノ夜監察波江田浩平酒興ニ乘シ抜刀當中ヲ擾乱ス、浩平死ヲ許サレ断髮隊中エ預ケトナル。是ヨリ一行飲酒ヲ禁シ、其他取締リノ法ヲ設ク。十二日拂曉前嶋貢吉京師ヨリ来リ報シテ曰ク、去ル九日大政更革洛中洛外勤王ノ諸侯兵ヲ以テ警衛其形勢天地一變禁中ノ盛況モ亦昔日ノ比ニ非ス。干戈ノ動ク旦夕測ル可カラス。愈警戒ヲ怠ル勿レト、衆皆ナ感激天地神明ヲ拜シ聖天子ノ萬歳ヲ祈ル。此ノ日加武呂駅ヲ發シ紀伊見峠ニ至ル。爰ニ紀州藩ノ關門アリ、關吏怪ミ問フ、十津川郷士歸郷ト偽リ通スカネ、駅ニ宿シ十三日高野山ニ入ル。山僧ニ説キ金光院ヲ本營トシ一行六寺ニ分宿ス。余等南山ノ麓神谷箭立ノ間ニ在リ、是レ紀州ヨリ高野山ニ通ル要害ノ地ナリ。居守スル事數日轉シテ高野山中金剛院ニ移宿ス。

慶應四戊辰正月二日敵兵襲来ノ流言アリ、東西奔走警戒ス、翌三日未明余軍監ノ列ニ坐ス、此時軍監タル者藤村四郎<sup>紫</sup>・三宮耕庵<sup>義</sup>・芳野昇太郎<sup>親</sup>及ヒ余ト共ニ四人ナリ。是ヨリ先キ香川敬三京師ニ使ス。三日復命ス、其報ニ曰ク、昨年十二月九日大政大變革ノ發令アリシ後千徳川慶喜京師ヲ去リ、大坂ニ退キ會津・桑名等之ニ從フ、尾州老公其間ニ斡旋、調和ヲ計ラン事ニ勉ムト雖トモ、其成功覺束ナシ云々、此ノ夜北方ニ火焰ノ擧クルヲ認ム、翌四日伏見戦争ノ快報ニ接セリ。此ノ日南山ヨリ兵ヲ出シ幕領大和國五條ノ陣屋ヲ拔キ、代官某ヲ虜ニシ南山鷲尾卿ノ營ニ送ル。八日大坂落去ノ報知アリ。爰ニ於テ南山ニ戍兵ヲ置キ、

十日鷲尾卿南山ヲ發ス。兵ヲ二分シ一ハ紀伊見峠ヲ越エ大坂ニ向ヒ、一ハ鷲尾卿親カラ引卒シテ五條ニ趣ク。余等之ニ從フ、紀伊見嶺ニ趣クノ兵大坂遁走ノ兵ト紀伊見峠ニ戦ヒ之ニ勝ツ、隊長小笠原某ヲ斬リ首級ヲ鷲尾卿ノ營ニ致ス。鷲尾卿引卒ノ兵八五條ヨリ金剛山千早ノ城址ヲ越エ古市ニ至ル、此ニ於テ紀伊見峠ニ向フノ兵ト合ス。兵大約一大隊、十五日大坂ニ入ル、鷲尾卿即時征討將軍仁和寺宮小松彰七親王殿下ノ本營ニ入り將軍ノ宮ニ謁シ戦捷ヲ賀ス。余等大參謀四條卿ニ謁ヲ賜フ、征討將軍鷲尾卿ニ入京ヲ命ス。同夜大坂ヲ發シ、翌日伏見ニ着ス。此ノ夜藤ノ森ニ宿シ十七日歸洛シ鷲尾卿邸ノ側ニ宿ス。昨年十二月八日京師ヲ發シ、日ヲ經ル僅カニ四旬、洛中ノ光景一變幕党人影ヲ止メス、薩長其他勤王ノ士京洛中ニ充滿ス。此盛事ニ逢フ誰カ積年王事ニ盡碎臥薪嘗膽辛苦經營、而シテ此ノ一大事業ヲ遂為セシ諸大家ノ勲功多大ナルヲ思ハサル者アラシヤ。真ニ是レ我國維新中興ノ紀元依ツテ以テ衆庶ノ至福ヲ享クル基タリ。國民タル者永ク記憶ニ存ス可キノ時ナリトス。

頃日岩倉二公子太夫君其定八千丸君其經東征ニ就キ、東山道總督トシテ東下セラレントス。香川敬三隨員タリ、余モ亦總督ニ從ハシテ京師ヲ發ス、進發ニ臨ミ岩倉老公其具ニ謁シ祝酒ヲ賜フ。從軍スル者宇田栗園其潤・清岡半四郎其公・香川敬三・北嶋仙太郎・藤井九成・平川和太郎・南部静太郎其男・岩崎・豊永・田崎等ナリ。此ノ日大津駅ニ宿ス、留マル事一日、中山道大垣城ニ入ル。余監察兼應接掛ノ命ヲ受ク、其器ニ非サルヲ以テ辞ス、允ルサレス日ヲ經テ薩・長・土三藩ノ兵至ル、薩藩伊知地正治、土藩板垣退助參謀トシテ未從ス。友人安岡亮太郎モ亦未ル、因州ノ兵未リ加ハリ四藩ノ兵合シテ三大隊、近江・美濃ノ兵二大隊、總軍三千ト稱ス。大垣ニ留マル事二十日、軍備漸ク整ヒ是レヨリ東海道ノ軍ト聲援ヲ通シ、東海・東山并ヒ進ミ關東ニ向フ。我カ軍兵ヲ二分シ先鋒隊及ヒ中軍トス、先鋒隊中軍ニ先ツ事二日、二月二十一日中軍大垣城ヲ發ス、信州下諏訪ニ至リ軍ヲ止ム。此ノ時相良惣藏ナル者官軍先鋒隊ト偽唱シ掠奪ヲ事トス。軍監ヲ出シ暴徒ヲ捕フ、惣藏其他巨魁ノ者七人ヲ斬リ、其餘ヲ放ツ。下諏訪ヨリ又軍ヲ分チ甲州路ヨリ江戸ニ向ヒ進マセシム。中軍和田碓氷ノ險ヲ越エ高崎城ニ達ス。此ノ時ニ方リ賊兵間道ヨリ高崎城ヲ襲フ。先鋒隊薩長大垣ノ兵之レニ當ル。三月九日上州梁田ニ戦フ、官軍大勝。賊兵日光ヲ經テ會津ニ遁走ス。甲州路ニ進ムノ軍モ亦勝沼ニ戦ヒ勝チ之ヲ本營ニ報ス、嚮キニ我カ總督府ヨリ東海道總督府ニ使セシ因州藩士中井範五郎密書ヲ帶ヒ復命ス。是

レ則チ三月十五日江戸城ヲ攻ムルノ戦期方略ナリ。軍ヲ潜メテ板橋駅ニ進ミ以テ其ノ期日ヲ待ツ。甲州ニ向フノ軍モ亦新宿ニ至リ陣ス。一夜東海道総督府ヨリ使アリ、徳川慶喜恭順江戸城ヲ退キ兵器ヲ官軍ニ納メ、慶喜已ニ水戸ニ至リ大命ヲ待ツ。依テ攻戦ヲ止ムト、衆皆ナ落膽後命ヲ待ツ。此ノ時ニ方リ上野州諸處土寇起ル、総督府兵ヲ出シテ之ヲ鎮撫ス。又、野州宇都宮邊賊兵起ル、軍監香川敬三・平川和太郎彦根藩等ノ兵ヲ卒ヒテ宇都宮ニ向フ。総州流山ニ於テ賊魁近藤勇ヲ捕エ、土藩上田楠次板橋ノ本営ニ護送ス。近藤勇ハ幕府新徴組ノ隊長、曾テ京師ニ在リ正義ノ士ヲ害ス已ニ我カ坂本・中岡等被レカ手ニ死セリ之ヲ刎シ首ヲ京師ニ送リ三條河原ニ梟ス。宇都宮ニ向フノ兵屢戦ヒ毎戦勝利、小山駅ノ戦ニ於テ賊兵大擧官軍ヲ襲フ、衆寡敵セス逃レテ宇都宮城ニ籠居シ、援ヲ板橋ノ本営ニ請フ。参謀伊知地正治板垣退助軍ヲ卒ヒテ之ニ趣ク。本軍板橋ニ留マル事三旬、江戸大名小路因州邸ニ移營ス。宇都宮ノ軍救ヲ得再擧大ニ勝ツ、賊白河ニ走ル、官軍追撃長驅シテ會津ニ向フ。此ノ時ニ方リ北國ニ賊兵起リ越後ヨリ信州ニ侵入セントス。事頗ル急ナリ、松代藩主真田信濃守軍監ヲ派遣セラレン事ヲ我カ東山道総督府ニ請フ。総督余ニ軍監ヲ命シ、急ニ信州ニ趣カシム。余欣然命ヲ拜シ松代藩士三沢刑部丞大里忠之進、総督従士多田佐一及ヒ家僕小池馬之助経ヲ從エ即夜江戸ヲ發ス。實ニ同年四月二十五日ナリ。昼夜兼行信州ニ入ル途ニ一騎アリ報ス則チ真田氏ノ斥騎ナリ。曰ク、本月二十三日賊ヲ飯山ニ討チ之ヲ走ラシ、追テ越後ニ至ルト。是ヨリ益急行閏四月朔日松代城ニ着ス。藩主真田信濃守ニ城中ニ相見エ、軍ヲ整エ松代城ヲ發ス。時ニ余カ卒ユル所ノ兵尾張・松代・上田・松本・飯田・諏訪・須坂・高遠・岩村田等信州各藩ノ兵合シテ千五百ト稱ス。閏四月三日進發飯山ヲ經テ越後ニ入り、高田城ヲ距ル二里荒井駅ニ陣ス。高田藩首鼠兩端且ツ敵兵要地ニ據リ備ヲ設ク、未タ客易ニ進ム可カラス。薩長ノ兵將サニ高田ニ未ラントス、之レト相合シ進撃スルニ如スト日夜兵ノ至ルヲ待ツ。漸クニシテ二藩ノ兵未リ余ニ報ス、即時高田ニ至リ参謀山縣狂介有朋・黒田了介清隆ト會議シ、攻守ノ方略ヲ定メ軍ヲ二分シ、一ハ北陸本道ヲ進ミ、一ハ山手通り小千谷ニ向フ。余ハ山手間道ヨリ進ムノ兵ヲ卒ユ。之ニ從フノ兵尾州及ヒ信州諸藩并ニ薩長合シテ二小隊惣勢凡千六百人。

閏四月二十一日新井駅ヲ發ス。此ノ夜河浦ニ宿ス、此ノ間道山岳四周行路險惡小豆峠・鼻蹴坂等數峰ノ大山高嶺ヲ跋涉シ、遂ニ千手ナル一小村落ニ出ツ。此ニ於テ地圖ヲ檢シ地理ヲ案シ土人ニ就キ敵情ヲ探ル。土人曰ク此ノ先二里芋坂、雪峠ノ險アリ、是レニ登レハ小千谷一望、敵此ノ險ニ據リ備ヲ設ク。而シテ斥候昼夜此ノ村ニ未ルト。又曰ク、筑摩川北三國街道小出嶋ニ又會



津ノ陣屋アリ。賊兵此ニ屯集スト、則チ攻戦ノ方面ヲ定メ又軍ヲ二分シ、一ハ三國街道六日町ヨリ小出嶋ニ向ヒ、一ハ千手ヨリ雪峠ニ進ム。余ハ雪峠ニ向フノ兵ヲ卒ユ。小出嶋ニ進ムノ兵ハ薩長松代飯山ノ各藩、司令官ニハ薩藩淵邊直右衛門・長藩杉山莊一郎・白井小助ナリ。余ハ尾州其他信州諸藩ノ兵ヲ卒ヒ、閏四月二十七日拂曉雪峠ニ向ヒ進ム。山下小坂村ナル一小村アリ、此ニ軍ヲ止メ諸藩兵中ヨリ壯兵ヲ選ミ斥候トナシ先ツ雪峠ノ動静ヲ窺ハシム。須臾ニシテ砲聲聞ユ。且ツ斥候敵狀ヲ報シテ曰ク、敵山腹ニ砲臺ヲ設ケ大小砲ヲ放下スト。即チ一隊ヲ筑摩川堤防ニ沿フテ進マシメ、一隊ヲ敵ノ正面ニ、又一隊ヲ山腹ヨリ敵ノ右側ヲ衝カシム。両軍互ニ激戦川土手ノ兵躊躇シテ進マス、余拔刀土手ニ至リ我カ兵ノ退キ走ラントスルヲ叱シ、之ヲ勵マシ漸クニシテ敵ト相距ル、二百歩正面ノ兵又退ク、亦正面ニ至リ進撃ヲ令ス。嚮キニ山腹ニ進ムノ兵何處ニ在ルヲ見ス。日已ニ西没思フニ今此ノ壘ヲ拔カスンハ一軍振ハス、雌雄ヲ決スル接戦ニ如スト。即チ死ヲ決シ正面ニ向ヒ吶喊ノ令ヲ下シ、自ラ陣頭ニ立ツ。次ク者僅カニ十數名彈丸雨注矢石ヲ冒カシテ進ム。距離五六十歩ニ垂ントシテ敵兵動ク、此機ニ乘シテ益急追遂ニ山腹ノ砲臺ヲ拔ク。我カ兵ノ怯情逡巡シテ進マサリシ者此ニ及ンテ齊シク未集ス。芋坂ノ砲臺ヲ拔キ山上雪峠ヲ望メハ、又一ノ砲臺アリ頻リニ下射ス。是モ亦直進ニ如スト愈突進肉薄ス。敵又壘ヲ舍テ逃ク、山頂ニ至レハ一小村アリ、敵兵舍ヲ焼キ小千谷ニ遁走ス。連日霖雨歇マス道路泥濘險坂ノ攻撃ニ困シメリ。嚮キニ敵ノ右側ニ出サシメントシテ山腹ニ進マシメタル兵山中道ヲ失シ、戦ヒ止ンテ後チ山上ニ未リ會ス。此ノ戦斬獲スル者七人、生擒スル者三人。我カ兵死傷十有七、大砲糧食等分捕リタル者多數。此夜山上ノ小村ニ露營ス。斥候巡邏ノ兵ヲ出シ警戒ヲ嚴ニス。翌曉發軍小千谷ニ向フ、小千谷ハ幕領會藩ノ預ル所依テ敵兵ノ根據地タリ。雪峠ノ戦ニ敗スルヤ其當リ難キヲ知り、陣屋ヲ捨テ走ル。官軍進ンテ小千谷ノ陣屋ニ入ル。雪峠ニ戦フノ日、東西砲聲頻リニ響ク、且ツ小出嶋ノ方向ニ當リ火烟揚ル。小千谷ニ入ルノ日報知相往未ス。嚮キニ本道鯨波ニ向フノ軍及ヒ雪峠小出嶋ト皆ナ開戦ノ日ヲ同クス。一軍鯨波ヲ敗リ柏崎ノ陣屋ヲ取り、一軍小千谷ヲ拔キ、一軍小出嶋ヲ奪フ、三軍大勝利、軍中相賀ス。越後長岡藩未タ恭順ノ効ナシ。朝廷屢出兵ヲ促シ軍糧ヲ徵スルモ一ニ之ニ應セス、且ツ會津・米沢等ト内謀官軍ニ抗セントス。小千谷ハ長岡ヲ距ル僅カニ三里、依テ要地ニ守備ヲ設ケ小出嶋ニ向フ兵ノ至ルヲ待チ共ニ進撃ヲ謀ラントス。而シテ小出嶋ノ軍守ヲ置テ小千谷ニ未リ會ス。

五月三日俄然長岡藩ノ老臣河合繼之助来り面會ヲ余ニ請フ、之ヲ一寺ニ延キ會見ス。洲邊・杉山・白井モ亦俱ニ坐ニ在リ、河合一書ヲ出シ徐ロニ語ツテ曰ク、寡君故有ツテ上京ヲ怠ル、此ノ歎願書情實具陳請フ、一見ノ後之ヲ朝廷ニ奉レト、且ツ曰ク我カ藩中未タ紛議解ケス、今官軍俄カニ領内ニ入ラン歟、必スヤ事端ヲ生セント言未タ終ラス。余叱シテ曰ク、其藩舉テ朝敵。余等朝敵追討ノ命ヲ受ク、其他ヲ知ラス、汝今言ヲ左右ニ託シ、日ヲ藉リ謀ヲ爲サントス、余等不肖ト雖トモ、未タ其術中ニ陥ラス、汝速カニ歸リ兵備ヲ収メ、官軍ノ至ルヲ待テ、他日兵馬ノ間ニ相見ント坐ヲ蹴ツテ起チ、四人齊シク營ニ歸ル。河合失望營門ニ来リ面接ヲ請フ事再三夜ヲ徹ス。遂ニ許サス、河合長岡ニ歸ル。官軍戍兵ヲ増シ益警戒ヲ加フ。翌四日小千谷ヲ距ル、三里片貝村ニ敵兵襲来ス、先鋒隊尾州松代ノ兵ヲ出シ、余又松代ノ別隊及ヒ飯田ノ兵ニ小隊ヲ卒ヒ之ニ繼ク。途ニ銃聲聞ユ益急進ス。一騎アリ報ス、此ノ山上敵兵アリ之ヲ措カハ必ス片貝ニ出テ我カ兵ノ背後ヲ断タント、地理ヲ案ニスルニ亦然リ、余兵ヲ麾ヒテ山上ニ至リ先ツ小千谷ニ急使ヲ発シ、事ノ急ナルヲ報シ、直ニ進ンテ敵ニ當ル、敵モ亦山上ニ在リ迎エ討タントス。即チ兵ヲ一文字ニ布列シ、仰ヒテ山上ノ敵ト戦フ。敵兵下射ス。彈丸雨注其側面ニ出ントスルモ溪谷深クシテ進ム事能ハス。稍アツテ西方ニ兵アリ、未タ官賊ヲ辨セス、望遠鏡ヲ以テ之ヲ望ムニ、丸八ノ旗号遙カニ顯ハル、是レ尾州ノ兵ナリ。夫ノ兵山ニ上レハ敵ノ背面ニ出ツ、敵之ヲ見ハ顧ミテ潰エン。此ノ時敵ノ発射益激シ、我カ兵死傷多ク、殆ント耐エ難キニ至ル。西方ニ在ルノ兵我カ兵ノ苦戦ヲ知ルモ遂巡容易ニ進マス。余手旗ヲ以テ頻リニ敵ノ背後ヲ襲フ可キヲ暗示ス。漸クニシテ進ム、敵兵之ヲ見テ果シテ潰ユ。此ノ機ニ乘シ逃クルヲ逐ヒ塚ノ山ニ至ル。敵川ヲ渡リ妙法寺村ニ遁ク。夜ニ入り兵ヲ小千谷ニ引ク。片貝ノ戦、尾州松代ノ兵敗レ、薩長ノ兵進ンテ之ニ勝ツ、皆ナ兵ヲ小千谷ニ還ス。

五月十日烈風迅雨信濃川將サニ漲ラントス。之ヨリ先キ小千谷ヲ以テ、官軍根據ノ地ト為ス。信濃川北岸榎峠ニ兵ヲ出シ、長岡ノ要害ニ備フ。敵此ノ風雨ニ乘シ不意ニ榎峠ヲ侵ス。我カ兵備ヲ怠リ一撃シテ敗ラル。敵兵要地ヲ占メ盛ンニ砲撃ス。小千谷對岸能ク其危急ヲ知ル。之ヲ援ハント欲スト雖トモ河水漲リ兵ヲ遣ルニ由ナシ、榎峠ノ守兵頗ル苦戦ス。薄暮河水少シク減ス兵ヲ渡ス。一舟舸子二十人一艘百金ヲ投ス、守兵救ヲ得テ要地ニ據リ翌ヲ對シテ戦フ。夫レ榎峠ノ地タルヤ右ニ大河ヲ帶ヒ左ハ險山一夫守レハ萬夫ニ當ル、真ニ北越要害第一ノ地タリ。我カ兵敵ノ怠ルヲ窺ヒ攻ムレトモ動カス、敵モ亦毎ニ我カ間ヲ窺フ。我

カ兵寡少、對壘數旬兵士銃ヲ持シ、惣軍履ヲ解カサル事十昼夜。此ノ戦長藩ノ名士時山直八戦死ス、軍中大ニ惜ム。我カ軍敵ノ全力ヲ榎峠ニ集中スルヲ偵知シ、信濃川ヲ渡リ直ニ長岡城ヲ衝カントス、策已ニ成ル。五月二十九日天未タ明ケス大嶋ノ津ヲ渡リ前岸ニ達ス、敵果シテ備ナシ。一舉シテ長岡城ヲ屠リ放火ス。榎峠ノ敵兵長岡火烟ノ起ルヲ望ミ顧ミテ潰ユ。官軍追テ長岡ニ進ム。長岡ヲ過クル三里、見附駅ニ進ミ、又壘ヲ對ス。本道ノ軍出雲崎ニ至リ相持ス。此ノ時官軍北ハ山手枋尾ヨリ南出雲崎ニ至ル殆ント二十里間兵ヲ備フ。敵モ亦奥羽越ノ精銳ヲ盡シテ死守ス。對スル五旬兩軍互ニ勝敗アリ。我カ軍持久攻守ノ不利ナルヲ慮リ、海軍ヲ以テ敵ノ腹背ヲ衝カントス。則チ兵艦ヲ柏崎ニ艤シ、兵ノ至ルヲ待ツ。余モ亦柏崎港ニ至ル。此ノ時、仁和寺宮彰仁親王殿下北陸道征討將軍トシテ柏崎ノ大本營ニ在マセリ、將軍余ニ謁ヲ賜フ、此ノ時、殿下親カラ左ノ令書ヲ下賜ス。令書ニ曰ク、多年勤王ノ志厚ク種々艱難候段神妙ノ至リ思召サレ軍曹召加エラレ候間、猶ホ王政御一新ノ御旨趣ヲ奉戴シ誠忠致ス可キ事。後チ又兵部省ヨリ左ノ達書ヲ受ク、自今改メテ軍曹召出サレ八人口ヲ下賜ス。八月二十四日軍艦拔錨ノ準備成リ、軍隊ハ筑前福岡藩ノ大鵬丸、筑後柳河藩千別丸ニ搭載ス。兩艦合セテ兵數千二百、長州藩丁戊艦、薩州藩春日艦先鋒タリ。加州藩季百里艦、藝州藩萬年艦ニ器械彈藥糧食等ヲ積ミ、是レニ繼ク。兵艦總テ六隻黄昏柏崎港ヲ發シ、翌拂曉越後松ヶ崎港ニ至ルヲ期ス。此ノ夜風浪大ニ起リ、佐渡ニ至ル頃天明ク、依テ諸艦皆ナ佐渡小木ノ港ニ入り日ノ暮ル、ヲ待ツ。日暮解纜松ヶ崎ニ向フ。此ノ夜彌彦山ニ當リ火烟ノ揚ルヲ見ル。陸兵進撃ノ期ニ方ル必スヤ敵陣ヲ放火スルノ火ナラント衆皆ナ快ヲ呼フ。拂曉松ヶ崎港ニ達ス。舩舟ヲ以テ兵士ヲ上陸セシム。之ニ先ンシテ軍艦ニ隻新潟港ヲ砲撃ス。松ヶ崎敵兵隻騎ナク軍隊悉ク上陸ス。越後新発田藩曾テ内應ノ約アリ。松ヶ崎ニ戍兵ヲ置キ以テ顧患ナカラシメ、全軍直ニ新発田城ニ入ル。兵ヲ四方ニ出シ敵ノ襲来ニ備フ。新発田ヲ距ル五里水原ニ會津ノ陣屋アリ。攻メテ之ヲ拔ク、新発田藩主溝口誠之進柏崎征討將軍ノ本營ニ至リ前罪ヲ謝セントス。余ヲシテ之ヲ監セシム。余溝口氏ヲ撃テ太夫濱ヨリ萬年艦ニ乗シ、柏崎ノ本營ニ至リ溝口氏ヲシテ將軍ニ謁セシム。

長岡城敵ノ爲ニ復撃セラレ、官軍又之ヲ進撃セントス。嚮キニ海上ニ於テ望ム所ノ火烟ハ、敵兵ノ爲メ長岡城ヲ復撃セラレタル者ナリト。此ノ時家大兄通俊君軍務官ノ命ヲ帶ヒ柏崎ニ在リ、相見ヘ互ニ其恙ナキヲ賀シ大ニ維新ノ成業ヲ祝ス。近日郷里宿毛ノ兵末り郎君之ヲ卒ヒ仲兄林祐次君モ亦從軍シ末ラントスルヲ聞ク。余長崎別後ノ経歴ヲ談シ、且ツ具サニ北地ノ戦狀ヲ語り

共ニ夜ヲ徹ス。從來我カ家ノ紋章ハ十六菊中小丸ニ一ノ字ヲ以テ定紋トス。維新後總テ菊ノ紋章ヲ禁セラル、依テ家大兄ト柏崎ニ相逢ヲ因トシ鬼抱キ柏ノ紋ヲ以テ家ノ定紋章トス。余ハ大參謀壬生卿ニ從ヒ萬年艦ニ乗シ、再ヒ柏崎ヲ發シ新潟港ニ至ル。新潟ハ余カ柏崎往復中官軍ノ有トナル。新潟ニ止マル。五日又新潟田ニ至ル。陸兵長岡ヲ再撃シ、大ニ勝チ長驅シテ新潟田ニ在ル兵ト合ス。是レヨリ惣軍ヲ三分シ、一ハ津川口ヨリ會津ニ向ヒ、一ハ米沢ニ向ヒ、又一ハ庄内口鼠ヶ関ニ進ム。會津ニ向フノ軍赤谷ニ戰テ之ニ勝ツ。庄内口ニ進ムノ兵関川ニ戰ヒ互ニ勝敗アリ。米沢ニ趣クノ兵織り峠ニ戰ヒ勝チ、玉川ノ関ニ進ム。米沢遂ニ降ヲ乞フ。九月朔日征討將軍本營ヲ新潟田城ニ移ス。余戰勞ヲ以テ賞ヲ賜フ。其書ニ曰ク、是迄戰勞少ナカラス其賞トシテ別紙目錄ノ通下賜ス目錄金米沢降ヲ請フヲ以テ、余ハ監察使トシテ米沢ニ出張藩情視察ヲ命セラル。即夜新潟田ヲ發シ昼夜兼行米沢ニ至リ、家老色部長門ノ家ニ宿ス。米沢藩主及ヒ老臣毛利上總等ニ面接シ、能ク一藩ノ事情ヲ審カニス。居ル事二日、又急行新潟田ノ本營ニ復命ス。又米沢藩ノ兵ヲ督シ、庄内ニ至ルノ命ヲ受ケ、直チニ出発庄内口清川ニ向ヒ進ム。戰ハスシテ庄内藩モ又降ル。之ヲ本營ニ報シ、而シテ兵ヲ卒ヒテ新潟田ニ歸ル。此ノ時會津藩モ亦兵力盡キ官軍ニ降ル。此ニ於テ奥羽越ノ地悉ク平定ス。

十月十五日征討將軍江戶ニ凱旋セントス。總軍新潟田ヲ發ス。余等將軍ニ從フ、北陸道高田ヨリ中山道追分駅ニ出ツ、諸道ノ軍江戶ニ輻湊スルヲ以テ將軍輕裝江戶ニ入ラレントス。余等諸軍ヲ卒ヒ直ニ京師ニ凱旋ス、實ニ慶應四年戊辰十一月十七日ナリ。此日宮中ニ召サレ感狀并ニ酒肴ヲ賜フ。其感狀ニ曰ク、征討ニ付軍監トシテ出張遠路跋涉日夜攻撃到ル處功ヲ奏シ、今般凱至ノ段其勲勞少ナカラス候、此節東京御駐輦ノ義ニ付取り敢ス軍勞ヲ慰フレ酒肴下賜リ候事。但シ春未兵事ニ付、大宮御所ニモ御内々御憂襟在ラセラレ、征討兵士ノ艱苦ヲ恤敷思召サレ日夜平定ノミ御祈念ノ所、今般凱旋ノ趣御内聽在ラセラレ御喜悅斜ナラス候。猶又御留守中ニ付、歸陣ノ者厚ク慰勞候様御内諭在ラセラレ候事。戊辰十一月 行政官。家大兄通俊君モ亦東京ヨリ歸リ未リ共ニ河原町三条ニ寓ス。日ヲ経テ通俊君土佐ニ歸ル。之ヲ大坂ニ送り別ヲ告ケ、又京都ニ歸リ河原町ニ寓ス。茲ニ維新初年ノ新春ヲ迎エ王政復古ノ大業ヲ賀シ、天皇陛下ノ萬歲ヲ祝ス。

明治二年己巳正月再ヒ北国行ノ命アリ、正月八日京師ヲ發ス。中山道妻籠駅ヨリ信州飯田ニ至ル、飯田藩主堀美濃守余ヲ城中ニ招キ宴ヲ設ク。昨年藩兵出軍。余カ部下ニ在リシヲ以テ其勞ニ報ユル所謂ナリ。飯田ヨリ塩尻ニ出、松本及ヒ川中嶋等ヲ経テ

北国街道ニ入り、正月十七日越後国新発田ニ着ス。新発田ハ越後府廳ノ在ル所、頃日越後府知事西園寺公望卿職ヲ辞シ東歸ス。士民大ニ方向ニ惑フ。肥前藩楠田十左衛門<sup>英世</sup>新潟府判事ノ命ヲ受ケ新潟ニ至ル。余新潟ニ趣キ楠田ニ面議ス。楠田府廳ヲ新潟ニ開キ政務ヲ掌トル。新潟府ハ専ラ外國事務ヲ司リ地方行政廳越後府ト分立セリ。人心初テ定マル。余權判府事ノ心得ヲ以テ新潟府ニ出仕ス。

同年三月壬生基修卿越後府知事ノ命ヲ受ケ未リテ府廳ヲ水原ニ開ク。依テ新潟府ヲ新潟縣ト改メ楠田知縣事タリ。余判縣事ノ命ヲ受ケ新潟縣ニ出仕ス。今般賞典舉行セラル、ニ付、昨年賊徒征討中部下各藩出兵軍隊ノ勤惰強弱ヲ考査シ差シ出ス可シトノ命アリ、即チ書シテ軍務官ニ出ス。同年六月二日昨年賊徒征討ノ軍功ニ依リ賞典禄ヲ賜フ。前參謀前原彦太郎<sup>誠</sup>代辨、同年六月二十一日接受ス。其ノ御沙汰書ニ曰ク、昨年賊徒掃攘ノ砌、軍務勲勵職掌ヲ盡シ候段、叡感淺カラス、依テ其賞トシテ永世禄高貳百石ヲ下賜ス。同年三月十五日三沢揆一郎<sup>重衡</sup>ノ媒介ヲ以テ松代藩花岡直之助ニ女音瀨ヲ娶リ婚ス。同年八月縣用ヲ以テ東上ス。是ヨリ先キ木挽町浅田宗伯ノ家ヲ以テ縣ノ出張所トナス。依テ之ニ居ル。余新潟ヲ発スル翌日新潟縣ヲ越後府ニ合併セラル、依テ新潟縣ノ官員皆廢官タリ。此時家大兄通俊君東京ニ在リ、開拓使判官ノ命ヲ奉シ近日箱館ニ趣カントス。同年九月十一日余居ヲ下谷入谷村ニ移ス。同二十日通俊君品川港乘船箱館ニ趣ク之ヲ送り別ヲ告ク。又居ヲ小石川金富町金剛寺阪上ニ移ス。同年十一月二十三日兵部省糺問大佑ニ任セラル。是ヨリ龍ノ口糺問司ニ出仕ス。

明治三年庚午一月二十五日音瀨男子ヲ擧ク、透ト命名ス。同年三月二十九日太政官ヨリ左ノ命アリ。今般軍曹ノ稱廢セラレ東京府貫屬士族ニ被仰付候事。軍曹ノ名稱ハ軍隊附屬ノ稱呼ニアラス、蓋シ族籍ノ稱タリ。余出国ノ後チ脱走ノ身トナリ、國ニ戶籍ヲ有セス、故ニ新ニ東京府貫屬士族トシテ別ニ一家ヲ興セリ。同年十月願ニ依リ本官ヲ免セラル。疾病ニ依ツテナリ。同年十二月有栖川宮一品熾仁親王家令ヲ命セラル。同月從七位ニ叙セラル。同月二十三日東京出發海路京都ニ至リ有栖川家ニ勤仕ス。

明治四年三月熾仁親王殿下ニ隨從東上ス。同年四月二品熾仁親王家令兼務ヲ命セラル。同年七月五日願ニ依リ有栖川宮家令ヲ免セラル、又疾病ニ依テナリ。同年十一月十三日宇都宮縣權參事ニ任セラレ十二月四日赴任ス。

明治五年十一月十日正七位ニ叙セラル。

明治六年一月九日願ニ依リ本官ヲ免セラル。又疾病ニ依テナリ。位記返上ス。同年七月二十四日神奈川縣權參事ニ任セラレ、翌日赴任ス。同年十一月十五日正七位ニ叙セラル。

明治七年一月二十八日佐賀縣權令ニ任セラル。是ヨリ先キ參議西郷隆盛・江藤新平・板垣退助等政府要路ノ人數輩征韓ノ止ム可カラサルヲ論シ、爭議數日朝廷遂ニ之ヲ容レス、此ニ於テ皆ナ其職ヲ辞ス。薩土肥三藩ヲ始メ其他少壯ノ士モ亦相卒ヒテ職ヲ辞シ、故國ニ就キ將サニ爲ス所アラントス。天下ノ人心爲メニ騷然タリ。佐賀藩士前參議江藤新平及ヒ鳴義勇等モ亦佐賀ニ歸リ同志ヲ糾合シ謀議スル所アリ。此時家大兄通俊君佐賀縣ニ令タリ。通俊君一夕横濱ノ余カ寓居ニ未リ語テ曰ク、方今ノ形勢ヲ視ルニ薩摩ニ西郷、山口ニ前原、佐賀ニ江藤等アリ、皆ナ政府ニ反抗シ危機旦夕ニ逼マレルカ如シ。察スルニ佐賀ハ他ニ先ンシ事ヲ舉ン。兄ハ他ニ思フ處アリ、汝我ニ代リ佐賀ニ趣カスヤ。汝若シ之ヲ諾セハ兄將サニ政府ニ請フ所アル可シト。余答テ曰ク、弟モ亦時勢ノ切迫ナルヲ知り、嚮キニ右大臣岩倉公ニ内謁所見ヲ具申シ、九州各地ノ風光ヲ探ラシメン事ヲ請ヒ命ヲ得タリ。即チ神奈川縣警部野村維章ト謀リ、野村現ニ九州ニ在リ、頃日續々其報告ニ接ス。實ニ大兄ノ言ノ如シ。弟不肖ト雖トモ政府若シ弟ヲシテ大兄ニ代ラシメ且ツ弟カ請フ所ヲ許サシメハ一死以テ國ニ報セン。大兄曰ク、政府ニ請フ所アリトハ如何ン。答テ曰ク、時勢將サニ斯クノ如シ、聞ク江藤等已ニ兵器ヲ弄シ士民ヲ集ムト。是レ尋常ノ手段ヲ以テ爲ス可キ時ニ非ス。且ツ今天下ノ人心左視右顧、政府若シ一タヒ其措置ヲ誤ラハ土崩瓦解亦收拾ス可カラサルニ至ラン。此ノ時ニ方リ、宜シク彼レニ先ンシ其慮リ莫カル可ラス。彼レ等既ニ私ニ兵器ヲ弄シ人心ヲ擾乱ス。其罪許ス可ラス。故ニ弟若シ佐賀ニ令タラハ軍隊ト共ニ佐賀城ニ入り、江藤其他主謀ノ者ヲ召喚シ、明カニ其不逞ヲ責メ、若シ反跡顯然タルモ言ヲ左右ニ託シ、其非ヲ掩ハントスルニ至ツテハ、直ニ逮捕其罪ヲ問フ可シ。事茲ニ至ラハ彼レ必ス其真相ヲ現ハシ兵争ノ端ヲ開ク可シ。此ノ時ニ乘シ一舉討滅其根本ヲ断チ、威信ヲ天下ニ示サハ、初メテ人心ヲ收攬スル事ヲ得ン。若シ謀茲ニ出ス、因循姑息尋常一様ノ手段ニ因ラハ、啻ニ事ヲ誤マルノミナラス、反テ彼レカ勢ヲ助長シ悔ユトモ及ハサルニ至ラン。弟カ第一ニ政府ニ請ハント欲スル所ノ者ハ軍隊派遣ノ事ニ在リ。又嚮キニ岩倉右府ニ具陳セシ旨趣モ其意ニ外ナラス、弟ノ意見斯ノ如シ、猶ホ大兄ノ教ヲ乞ハント。家大兄默シテ去ル。後チ數日佐賀縣權令ニ任セラレタリ。茲ニ於テ内務卿大久保利通君ニ面シ、余カ意見ヲ縷述シ且ツ曰ク、生等固ヨリ國家ノ爲メ死ヲ期シ

テ任ニ趣ク、後チ徒死ニ終ハラサラン事深ク閣下ノ賢察ヲ煩ハサント。卿熟思僅カニ善諾ノ一語ヲ漏ラスニ過キスト雖トモ、其決心面ニ頭ハレ、大ニ余カ心ヲ領セラレシ者ノ如シ。尋常人ノ多言ニ勝ル數倍矣。又政府ニ請フニ左ノ五个條ヲ以テス。

其一 軍隊若干佐賀縣ニ派遣ノ事。

其二 高俊佐賀ニ至リ能ク其事實ヲ偵察シ、江藤其他巨魁ノ者ヲ召喚糺問シ、其反跡顯然タルヲ認ムル時ハ直ニ逮捕命ヲ待ツ事。

其三 彼レ若シ暴舉、兵端ヲ開ク時ハ命ヲ待タス討滅ス可キ事。

其四 事ノ緩急ニ應シ、任地ニ於テ兵ヲ募集スル事。

其五 彼ノ地ノ狀勢ニ依リ、速カニ追討ノ兵ヲ發セラル、事。

大久保内務卿其書ヲ収メ、余ヲ從エ太政官ニ至ル。即日則チ二月四日上請ノ條件悉ク允許セラル。且ツ出兵ハ熊本鎮臺ニ命シテ一大隊ヲ派遣セシムル旨西郷陸軍卿ヨリ通達ヲ受ク。

同年二月七日父兄妻子ト訣別東京ヲ發ス。外国汽船ゴルデンエージ号ニ投シ、横濱港ヲ解纜ス。同行スル者佐賀縣大属小出光照、同中属牧退藏、同少属小嶋正一・上村昌義等ナリ。此ノ行長崎ヨリ佐賀ニ入ルヲ期ス。船馬関ヲ過キ大里ニ至ル、小船アリ未テゴルデンエージ号ノ止航ヲ求メ、且ツ佐賀縣令ノ在否ヲ問フ者アリ。余之ヲ聞キ船長ニ請フテ進行ヲ止メ其人ヲ上ラシメテ面接ス。則チ小倉縣小幡權令ノ使ニシテ鈴川某ナル者ナリ。鈴川曰ク、近日佐賀地方頗ル不穩ノ形勢ニシテ士民兵器ヲ携エ市街ヲ横行シ、且ツ旅人ノ通行ヲ禁シ、警戒極メテ嚴重ナリ。君ノ任所ニ至ルニ先タチ告クルニ、此ノ事ヲ以テセヨト小幡權令ノ命スル所ナリ。余此ノ報ニ接シ、事ノ益急迫ナルヲ察シ、直ニ小倉ニ上陸、急行熊本ニ至リ、軍隊ト共ニ佐賀ニ至ルニ如スト。之ヲ小出光照ニ示シ、唯小出一人ヲ從エ小倉ニ上陸、急ニ小幡權令ヲ訪フ。同氏ハ嚮キニ宇都宮縣參事タリシ時、余權參事タリシ故ヲ以テ能ク其平生ヲ知ル。小幡余ヲ一室ニ延キ九州地方最近ノ形勢ヲ語り、事ノ急迫ナルヲ説ク。且ツ曰ク、君ノ赴任已ニ地方ニ普シ、行途萬一ノ變測ル可カラス。宜シク洋装ヲ脱シ平常旅人ノ如クシテ微行スルニ如スト。余俄カニ上陸常衣ナシ、小幡ノ衣服ヲ借り其言ノ如クス。同月十日夜ヲ侵シ小倉ヲ發ス兼行熊本ニ至ル。陸軍少将谷干城熊本鎮臺司令長官タリ。從弟陸軍中

佐中村重遠參謀タリ。余直ニ谷少將ヲ鎮臺ニ訪ヒ、政府ノ密命ヲ告ケ軍隊ト共ニ佐賀ニ入ラン事ヲ謀ル。少將曰ク、予已ニ其命ヲ受ク、然リ而シテ近時熊本神風党モ亦不穩ノ形跡アリ、寡兵ヲ分チ此ノ大城ヲ守ル甚タ其難キニ苦ムト。余曰ク、陸軍卿余ニ告クルニ、熊本兵寡少ナル時ハ他ノ兵ヲ以テ之ヲ補フノ言アリ。果シテ君ノ言ノ如クンハ其理由ヲ具シ、更ニ出兵ヲ政府ニ請フハ如何ン。佐賀ニ対スル措置ノ如キハ其機一日モ緩フス可カラスト。少將遂ニ決意ス。即時歩兵一大隊ヲ佐賀ニ發遣ス可キノ命ヲ下ス。則チ其兵ヲ二分シ海陸ヨリ進軍セシム。陸路ヨリ進ムノ兵ニハ陸軍少佐佐久間太之ヲ卒ヒ、海路ヨリ進ムノ兵ニハ陸軍少佐山川浩之ヲ卒ユ、余ハ海路ヨリ進ムノ兵ト俱ニ佐賀ニ入ラントス。同月十四日ノ夜肥後國高橋ヨリ小蒸汽船ニ艘ヲ以テ軍隊及ヒ兵器ヲ搭載シ即夜高橋ヲ發シ、肥前國早津江ニ向フ。陸路ノ兵ハ十三日熊本ヲ發シ同時ニ佐賀ニ入ルヲ期ス、同十五日早曉船早津江ニ着ス。余軍隊ニ先タチ佐賀城ニ入ル。佐賀縣廳ハ則チ佐賀城ニ在ルヲ以テナリ。是ヨリ先キ佐賀藩士前山精一郎・江藤新平等ト議協ハス頻リニ舉兵ノ非ナルヲ論シ、遂ニ同志ノ士ト謀リ、私カニ結合シテ江藤等ノ為ス所ヲ窺フト。余豫メ之ヲ探知ス。故ニ佐賀城ニ入ルヤ直ニ前山ヲ其邸ニ訪ヒ其意旨ヲ叩ク、前山曰ク、江藤等嚮キニ歸縣シ爾未少壯ノ士ヲ集メ説クニ政府施政ノ方針ヲ非難シ、且ツ曰ク、薩ノ西郷、長ノ前原、土ノ板垣等近日必ス政府ニ反抗シ大ニ為ス所アラン。今ヤ天下ノ人心モ亦大ニ捲ミ事有ランヲ望ム者ノ如シ。我カ佐賀人士戊辰ノ役兵馬ノ功少ナキヲ以テ常ニ薩長等ノ背後ニ立ツ、吾人歎息ニ耐エサル所トス。此ノ時ニ方リ速カニ所向ヲ決シ、天下ニ先ンシ兵力ヲ以テ政府ノ非行ヲ責問ス。天下ノ志士必スヤ併ヒ起ラン。所謂ル先ンスレハ人ヲ制ス。此ノ機失フ可カラスト頻リニ衆庶ヲ煽動シ、今日ニ至リ我カ輩同志ノ士數十ヲ除クノ外、皆ナ江藤等ニ附隨シ、既ニ電線ヲ断チ隊伍ヲ組ミ、兵器ヲ携エ市街ヲ横行ス。縣官モ亦多ク江藤ニ與ミス。君今赴任縣廳ニ至ルモ恐クハ其為ス所ナカル可シ。目下ノ狀勢已ニ斯クノ如シ。政府急ニ非常ノ處置徴ツセハ遂ニ救治ス可カラサルニ至ラント。慷慨ノ至情言外ニ溢ル。余徐ロニ前山ニ告ケテ曰ク、政府頓ニ此ノ事アランヲ慮リ、廟堂ノ畫策已ニ定マル。余今政府ノ命ヲ奉シ、熊本鎮臺兵ト共ニ今朝早津江ニ着シ臺兵モ亦續ヒテ城ニ入ラントス。猶ホ陸路ノ兵モ亦明日ヲ待タスシテ未ラン。君請フ少シク意ヲ安ンセヨ、聞クカ如クンハ縣吏已ニ江藤ニ與ミスト、又用ユ可カラス。君カ部下ノ士數人ヲ縣廳ニ入レ余カ幫助タラシメヨ。且ツ足下同志ノ士ハ隊伍ヲ編制シ彼カ暴舉ニ備フ可シ。余已ニ募兵ノ認許ヲ得タリ、直ニ政府ニ申報ス可シ。然レトモ慎ミテ彼ニ先



シ兵ヲ動かス可カラス。是レ實ニ至要ノ事タリ。足下宜シク部下ニ示シ此ノ事ヲ誓ハシメヨト。前山拍手喜色満面爾後余カ指揮ヲ待ツテ進退ス可キヲ約ス。余別レテ城ニ入り一面余カ赴任ノ事ヲ告示シ、又別ニ告諭ヲ發シ、民心ノ動揺ス可カラサルヲ以テス。一面江藤新平・嶋義勇・石井武之助ノ三名ヲ召喚ス、日暮軍隊城ニ入ル。江藤等遂ニ召喚ニ應セス前嶋竊カニ使ヲ城中ニ未シ、余ニ告ケテ曰ク、江藤等軍隊ノ城ニ入り且ツ貴官ノ召喚ニ接スルヤ急ニ戰事ヲ準備ヲ整フ。今夜攻戰ノ策ニ出ツルヤ測リ知ル可カラス。必ス用意怠ル勿レ、且ツ我カ一隊此ノ地ニ在ラン欤、彼レ我カ兵ノ少ナキヲ知り先ツ我カ隊ヲ討撃セン。我カ隊モ亦城ニ入ル欤、或ハ郭外ニ出テ陸兵ノ未ルヲ待チ共ニ事ヲ為サンニハト。余之レニ答フルニ陸路ノ兵ヲ郭外ニ待ツ可キヲ以テス。前山ノ使者去ル、城中此ノ報ニ接スルヤ攻守ヲ議シ兵ヲ出シ糧食ヲ購フ。夜八時ニ至リ砲聲響キ鯨波四方ニ起ル。城中四門ヲ閉チ警戒防禦ス。敵兵白砲ヲ以テ破裂彈ヲ城中ニ放下ス。城中ノ兵墻壁ニ據リ小銃ヲ以テ狙撃ス。終夜砲聲絶エス。同十七日拂曉北門ヲ出テ大ニ門外ニ戰フ互ニ死傷アリ。山川少佐手腕ニ傷キ大池大尉戰死ス。防戰三晝夜、而シテ陸路ノ兵至ラス。城中糧食彈藥共ニ乏シ、一端城ヲ出テ陸路ノ兵ト合シテ之ヲ討滅スルニ如スト議已ニ決ス。余廳中剩ス所ノ金穀器具等ヲ燒棄セシメ、二月十八日曉霧ヲ侵シ城ノ東門ヨリ出ツ。敵豫メ兵ヲ東門ノ南側ニ伏セ激シク我カ兵ヲ横撃ス、我カ兵死傷最モ多シ、大屬小出光照モ亦足部ニ傷ツク、起ツ能ハス。光照曰ク、生テ敵兵ノ手ニ死シヨリ寧口刎首セヨト。余光照ヲ抱負ニ三步ヲ試ム、此ノ時敵ノ射撃最モ激烈、光照事ノ為ス可カラサルヲ論シ自刃セントス。余涙ヲ吞ミ光照ヲ刺ス。而シテ首級ヲ収メ逃レント欲スト雖トモ事急ニシテ携フ事能ハス。捨テ奔リ蓮池ヲ經、筑後川ヲ泳キ辛フシテ久留米ニ遁ル。途上外衣ニ銃丸ヲ受クルニ佐賀城ヲ出ルヤ敵ノ側面射撃ヲ受ケ死傷算ナシ、且ツ諸富ノ渡津ニ向ヒシ兵敵ノ伏兵ト衝突多クハ斃ル。殘餘ノ兵ニ々々久留米ニ未リ合ス、此ノ戰兵ヲ失フ二百餘、縣官七名中余ト共ニ僅カニ三名ヲ餘スノミ。嚮キニ熊本ヲ發シタル分遣隊、久留米ニ至ルヤ佐賀城既ニ陥ルト誤聞シ、空シク兵ヲ止メタリト、余久留米ニ着シ直ニ佐賀ノ變事ヲ政府ニ電報ス。是ヨリ先キ佐賀ノ變報東京ニ達スルヤ、政府先ツ大久保内務卿ヲ福岡ニ派遣シ、繼ヒテ佐賀追討ノ大詔ヲ發セラレタリ。大久保内務卿既ニ福岡ニ着スルヲ聞キ、余等急行福岡ニ至リ、内務卿ニ相見エ、具サニ佐賀暴動ノ顛末ヲ述へ、且ツ爾後ノ進止ヲ謀ル。大久保内務卿大ニ余カ勞ヲ慰メテ曰ク、初メ佐賀ノ乱起ルヤ足下已ニ斃レタリト聞キ衰惜ノ情ニ堪エサリキ。今圖ラス其恙ナキヲ見ル欣喜何ソ是レニ及カン。嚮キニ

足下赴任ノ時ニ臨ミ豫メ二三ヲ約ス、今聊カ前約ヲ履ム。既ニ佐賀追討ノ大詔出テ天下ノ人心稍定マル、又憂フル事ナシ。足下モ亦其意ヲ安シシ、猶ホ共ニ國家ニ盡ス可シト沈黙ノ人此ノ數語アリ、余唯死セサルヲ惜ムノミ。家兄通俊君モ亦大久保卿ニ從ヒ福岡ニ在リ、共ニ其恙ナキヲ賀ス。大兵悉ク福岡ニ至リ道ヲ分ツテ佐賀ニ向フ、余等大久保卿ニ從ヒ田代口ニ至ル。佐賀ニ向フ各道ノ軍連戰連勝、江藤新平・嶋義勇等皆ナ遁走遂ニ佐賀城ヲ復ス事旬日ヲ出スシテ平ク。即チ縣廳ヲ開キ縣務ニ從事ス。先ツ小出光照ノ遺骸ヲ索メ首級ヲ得タリ。之ヲ東京ニ致シ芝泉岳寺ニ葬リ、後チ墓碑ヲ建テ之ヲ祭ル。諸軍皆ナ佐賀ニ集マル。人ヲ各地ニ派シ、江藤等ヲ搜索追捕セシム。嶋義勇・朝倉彈藏等ヲ鹿兒嶋ニ捕エ佐賀ニ護送ス、江藤等未タ縛ニ就カス。同年二月十八日正六位ニ叙セラル。同年三月二十日侍從高嶋軻之助勅使トシテ佐賀ニ來リ酒肴ヲ賜フ。其御沙汰書ニ曰ク、佐賀縣兇徒嘯聚ノ報ヲ聞キ、速カニ赴任暴烟ヲ避ケス説諭ニ及ヒ候處、却テ彼ノ襲撃ニ逢ヒ、困難ニ罹リ候段苦勞ニ思召サレ候。依テ酒肴ヲ賜フ。聞ク江藤等鹿兒嶋ヨリ四國ニ遁カレタリト。大久保内務卿余ニ四國行ヲ命ス。江藤等搜索捕獲ノ為メナリ。即日佐賀ヲ發シ博多ヨリ光運丸ニ乘リ先ツ和嶋ニ渡ル、江藤等已ニ宇和嶋ヲ去リ土佐ニ走ルト云フ。轉シテ高知ニ至リ、岩崎權令ニ面議シ追捕ノ事ヲ謀ル。岩崎曰ク、江藤等嚮キニ此ノ地ニ來リ窃カニ板垣ニ依リ事ヲ謀ラントス。板垣等面セス江藤等失望潛行徳嶋ニ出テ横濱ニ至リ、終ニ外國ニ投セントスルノ密報ヲ得タリ。今捕吏ヲ四方ニ發シ逮捕ニ從事ス、其踪跡ヲ得ル必ス近キニ在ラン。君請フ暫ラク之ヲ俟テト其言疑フ所ナシ。依テ其報ヲ待ツ後チ二日果シテ江藤新平・香月桂五郎二人ヲ縛シ來ル。則チ之ヲ光運丸ニ収監シ直ニ浦戶港ヲ發シ、博多ニ着キ次ヒテ佐賀ニ護送ス。江藤・嶋・香月・朝倉等巨魁ノ者皆ナ就縛。則チ臨時裁判所ヲ佐賀ニ開キ河野敏鎌裁判長タリ。糺彈夜ヲ徹シ江藤其他十有餘名ヲ斬ニ處シ、其他刑罰各差等アリ。此ニ於テ佐賀ノ乱全ク鎮定シ諸軍皆ナ凱旋ス。大久保内務卿モ亦善後ノ方針ヲ余ニ授ケ東歸ス。余是ヨリ日夜縣務ニ鞅掌戰後幾多ノ要務ヲ處理ス。

同年四月七日二男圓生ル。同年七月十八日内務省五等出仕ニ轉補セラル。北嶋千太郎代リテ佐賀縣令タリ。則チ縣務ヲ北嶋ニ讓リ東京ニ歸ル。是ヨリ先キ臺灣征討ノ議起リ、西郷從道兵ヲ卒ヒテ臺灣ニ航シ生蕃ヲ討滅ス。茲ニ於テ大ニ清國トノ葛藤ヲ惹起シ事甚タ重大ノ事件タリ。我カ政府大久保内務卿ヲ全權辯理大臣トシテ清國ニ派遣セシムルニ至ル、余此時請暇函根ノ温泉ニ遊フ。大久保卿使清ノ大命下ルノ報ニ接スルヤ早急歸京、深夜大久保邸ニ至リ大臣ニ見ミエ清國ニ從行犬馬ノ勞ヲ取ラン事ヲ乞

フ。大臣曰ク、日時切迫今俄カニ足下ヲ伴フ事能ハス、宜シク後日ノ報ヲ待ツ可シト。余悄然トシテ去ル。伊藤博文内務卿ヲ代理ス。同年八月十七日伊藤内務卿余ヲ官房ニ呼ヒ示シテ曰ク、大久保大臣神戸ヨリ書ヲ寄セ足下ニ清國出張ヲ命セヨト、其用務分明ナラスト雖トモ速カニ行ヒテ大臣ノ一行ニ加ハル可シト。余惟ラク是レ嚮キニ大臣ニ請フ所アルヲ以テナリト。司法省七等出仕井上毅モ亦同一ノ命ヲ受ク。同年八月二十日井上毅ト共ニ横濱ニ至リ飛脚船ニ投シ清國ニ向ツテ発ス。家人山邊勇輔ヲ伴フ。神戸・長崎・上海・芝罘等ニ寄港シ天津ニ着ス。九月八日天津ヲ発シ天津川ヲ溯リ、日ヲ経ル四日通州ニ至リ同十二日北京ニ着ス。直ニ大久保大臣ノ旅館ニ至リ大臣ニ面シ伊藤内務卿ノ書ヲ致ス。是ヨリ先キ臺灣事件ニ関シ我カ全權公使柳原前光、清國政府ト談判數次、彼レハ自國ノ版圖ト謂ヒ、我ハ無主ノ嶋嶼ナリト論シ、其ノ要領ヲ得ス。大久保大臣初メテ清國皇帝ニ謁見シ、國書ヲ捧ケ更ラニ清國大臣ト総理衙門ニ談判ヲ開始ス。窃カニ其ノ大要ヲ聞クニ曰ク、臺灣生蕃無主ノ嶋民ハ、嚮キニ我國無辜ノ漂流難民ヲ戮殺ス。依テ日本政府ハ兵ヲ蕃地ニ派遣シ夫ノ嶋民ヲ糺責シ、我カ兵ニ抗スル者ハ皆ナ之ヲ討滅シ、今ヤ事既ニ終リ、我カ有ニ歸ス。然ルヲ清國政府ハ臺灣全嶋ヲ清國ノ版圖ナリトシ、我カ國問罪ノ軍ヲ發シタルヲ非義ナリトス。若シ夫レ生蕃ノ地ヲ清國ノ屬地ナリトセハ、何ソ我カ漂流民ヲ斬殺シテ顧ミル所ナキヤ、亦何ソ屬地タル各般ノ設備ヲ為サ、ル欵。政令教化共ニ一ノ版圖タル可キ實ヲ見ルニ足ル者ナシ。何ヲ以テ生蕃ヲ清國ノ屬地ナリト云フ哉ト。清國大臣ハ曰ク、臺灣全嶋ハ固ヨリ清國ノ屬地タリ。今萬國ノ地圖ニ照シ之ヲ見ルモ明ラカナル所、其ノ政令教化ノ及ハサル所アルハ邊海ノ嶋嶼ナレハナリ。我カ國大國此クノ如キ嶋嶼計フルニ違アラス。然ルニ親交ヲ有スル隣邦ニシテ一片ノ知照タモ為サス、漫ニ我カ境地ヲ侵略ス。無情モ亦甚シカラスヤト其ノ争點茲ニ在リ。斯クノ如キ談判往復數次、蓋シ我カ大臣決論ノ奧義ハ生蕃ヲ我カ日本ノ版圖トラシムル欵。然ラスンハ問罪出軍費壹百万兩償金トシテ清國ヨリ出銀セシムル欵。若シ此ノ二箇ノ條件ニシテ行ハレザラン欵。遂ニ最後ノ手段ニ據ルノ外ナキモノト思意セルカ如シ。九月半ヨリ十月末ニ至ルモ清國政府悠々不斷其ノ局ヲ了セス、我カ大臣曠日ノ慨ニ耐エス。決然談判ヲ絶チ、將サニ公使ト共ニ歸朝セントシ、専ラ其準備ニ従事ス。已ニ北京ヲ去ラントスルノ前夜、英國公使ウエード氏俄然我カ大臣ノ館ニ未リ仲裁ヲ試ミントスルノ意ヲ致ス。大臣一度ヒハ之ヲ謝絶シタルモ英公使和義ヲ破ルノ不可ナルヲ説ク事切ナリ。大臣モ亦英公使ノ厚意ヲ空シクスルニ忍ヒス。遂ニ其ノ言ヲ容レ、事ノ起原ヨリ今日ニ至ルノ顛末ヲ縷

述シ、我カ政府ノ要求ヲ明示ス。則チ生蕃ヲ我カ日本ノ版圖タラシムル欤。若シ強ヒテ生蕃ヲ清國ノ屬地ナリト主張スル時ハ、止ムヲ得ス其ノ一步ヲ譲リ、将来必ス彼レカ屬地タルノ實ヲ擧ケシメ、且ツ今回我カ發軍費壹百萬兩ヲ償金トシテ出銀セシムルノ二條件ヲ以ス。是ヨリ英公使ハ清國政府ト我カ大臣ノ間ニ日夜奔走往来シ、終ニ清國政府ハ前ニ二條件ノ我カ要求ニ應セス。反ツテ名ヲ我カ臺灣ニ建營セシ兵舎ノ撤去費且ツ漂流難民ノ賑恤費トシテ清銀五十萬兩ヲ出サントスト云フ。我カ大臣頻リニ其ノ不可ナリヲ論スルモ容易ニ希望ヲ達スルニ到リ難キ者ノ如シ。此ノ時ニ方リ生蕃在陣ノ我カ兵惡疫ニ罹ル者最モ多ク、且ツ土地嶮峻此ノ鳴地ヲ有スルモ畜ニ益ナキノミナラス、之ヲ護モルノ難キ損益相償ハサルノ說屢報告ニ顯ハル。顧ミテ本邦ノ國情ヲ察スレハ、或ル者ハ遠征ノ止ム可カラサルヲ説キ、又或ル者ハ名正シカラス。且ツ國幣乏シ、平和ヲ保ツニ如スト唱エ、日夜大臣ニ書ヲ寄スル者頗ル多シ。茲ニ於テ大臣内外ノ事情ニ鑑ミ、将来ノ利害ヲ考量シ、寧口彼レノ言ヲ容レ、平和ヲ維持スルノ勝ルニ如シト、断然決意其ノ旨ヲ英公使ニ通ス。公使之ヲ清國政府ニ計リ、受金成文ノ條約ヲ交換シ、此ニ於テ臺灣事件ノ葛藤全ク落着ス。余等談判中少間ヲ得、大臣ノ一行高崎正風・小牧昌業其他五六輩ト萬里ノ長城ヲ見ント欲シ、北京ヲ出ツ。途次明ノ十三陵ニ至ル。規模宏大其ノ結構眼ヲ驚カセリ。三日ニシテ居庸関ニ達ス。関ハ忽必烈ノ築ク處、其ノ建造ノ宏壯ナル真ニ宇内ノ奇觀ト謂フ可シ。居庸関附近ヲ回遊シテ北京ニ歸ル。談判終局ノ日大臣ハ陸軍大佐福原和勝・小牧昌業及ヒ余ト三名ニ急行歸朝ヲ命シ、兩國交渉ノ顛末ヲ我カ政府ニ報告セシム。大臣ハ歸路臺灣ニ寄港シ、稍日時ヲ要スルノ故ヲ以テナリ。命ヲ受クルノ翌日大臣ニ先ツテ北京ヲ發シ陸路天津ニ至リ、十一月一日我カ軍艦孟春艦ニ乗シ、天津ヲ出テ芝罘ニ航シ、更ニ明治艦ニ移リ、横濱ニ向ツテ直航ス。余等芝罘ニ至ル時大臣已ニ同港ヲ發シ、臺灣ニ向エリト。余等カ大臣ノ一行ヨリ後レシモノハ陸路ヲ取リシト、孟春艦速力遲鈍ナルヲ以テナリ。大臣芝罘ヲ發スルニ臨ミ明治艦長ニ托シテ一書ヲ遣セリ。披ラキ見ルニ狂歌アリ。

磯邊登茂 於久禮孟春 和勝海能 浪高俊遠 奈武登昌業

斯ハ孟春艦長磯邊包義及ヒ余等一行三名ノ名ヲ包ミ戲レニ詠マレシモノ、船中一興大ニ航海中ノ徒然ヲ慰メタリ。海上平穩十一月十一日横濱ニ着ス。直ニ入京三條・岩倉ノ兩大臣及ヒ大隈・伊藤ノ邸ニ至リ大久保大臣ノ命ヲ傳エ茲ニ其使命ヲ了ス。翌十二日福原・小牧余ト三名太政官ニ召サル。三條太政大臣豫メ余等ニ示シテ曰ク、彼我兩國交渉ノ顛末并ニ彼ノ地見聞ノ及フ處具サ

ニ直奏ス可シト。已ニシテ天皇陛下臨御、三人相ヒ携エテ起チ福原大佐先ツ進ミ余・小牧之レニ次ク、天顔咫尺三名ニ坐ヲ賜フ。侍臣ヲ退ケ三條・岩倉兩大臣、木戸・大隈・伊藤其他各省卿天皇ノ下左右ニ列ス。福原和勝奏シテ曰ク、臣等大久保大臣ヨリ今般ノ事件落着ノ大意ヲ我カ政府ニ報告ス可シトノ旨ヲ承ケ、昨日歸朝セリ。其ノ詳細ニ至ツテハ固ヨリ臣等ノ敢テ知ルヘキ所ニアラス。唯大久保大臣ヨリ我カ政府ニ報告ス可シト臣等ニ命シタル談判ノ要旨ハ、生蕃無主ノ嶋民我カ無辜ノ漂流難民ヲ戮殺ス。故ニ我カ政府ハ兵ヲ蕃地ニ派遣シ彼ノ蕃民ヲ責問討罰シ、今已ニ我カ有ニ歸ス、然ルヲ清國ハ萬國ノ地圖ニ微シ自國ノ版圖ナリト主唱ス。争點茲ニ在リシ事ハ已ニ大久保大臣北京ヨリ奏上ニ及ヒシ處、爾來我ハ清國ノ属地ニ有ラサル事實ヲ以テ難シ。猶ホ且ツ當初蕃地ハ化外ノ地ナリト答エタルヲ以テ非舉ニアラサルヲ論シ、彼レハ專ハラ地圖ニ依ツテ版圖ナリト云ヒ、又生蕃ノ貢物ハ熟蕃ニ致シ、熟蕃併セテ之レヲ清國政府ニ納ムト云フ。皆ナ証左ノ徵スルモノ莫シ。斯クノ如キ應答十數回、日ヲ経ル殆ント四旬ニ及フモ一モ其ノ要領ヲ得ス。大臣交渉ノ纏リ難キヲ認メ交渉ヲ絶チ、柳原公使ト共ニ歸朝セントスルニ決シ、則チ其ノ旨ヲ清國政府ニ通シ、又各國公使ニ別ヲ告ケ專ハラ歸朝ノ準備ヲ為シ、已ニ北京ヲ發セントスル前夜ニ當リ、英國公使ウエード、我カ大臣ノ旅館ニ來リ、仲裁ヲ試ミントスルノ意ヲ致ス。我カ大臣一回ハ之レヲ謝絶スルモ、英公使頻リニ平和ヲ破ルノ不可ナルヲ論シ、各國公使モ亦交々末テ勧誘ス。我カ大臣再三再四其ノ利害得失ヲ考慮シ、且ツ内外ノ事情ニ鑑ミ遂ニ英公使ノ言ヲ容レ、清國ニ向ツテ要求スルノ二個條ヲ明示ス。一ニ曰ク、生蕃ヲ我カ日本ノ版圖タラシムル事。二ニ曰ク、若シ蕃地ヲ清國ノ属地ナリトシテ、日本ノ版圖タルヲ肯ンセサル時ハ將來其ノ属地タルノ實ヲ舉ケ、且ツ這般我カ出師軍費壹百萬兩ヲ償金トシテ出銀セシムル事、是レヨリ英公使清國政府ト我カ大臣トノ間ニ往復數回遂ニ清國我カ要求ニ應セス、反ツテ名ヲ變シ我カ蕃地ニ建營セシ兵舎ノ撤去費及ヒ漂流難民ノ賑恤費トシテ清銀五十萬兩ヲ出サントスルヲ以テス。大臣其不可ナルヲ論スルモ、英公使勧誘シテ措カス。茲ニ於テ大臣モ亦内外ノ事情彼是ノ利害ニ於テ顧ミル所アリ。遂ニ英公使ノ仲裁ヲ諾シ、事初メテ落着セリ。其交渉ノ決議ニ依リ成文條約ヲ交換シテ終局ス。大久保大臣歸途臺灣ニ至ルノ要務アルヲ以テ、臣等ニ命シテ歸朝セシメタリト奏聞ス。天皇入御、各省卿談判中ノ狀況ヲ交々細問ス。三人問ヒニ應シテ答フ、終ツテ暇ヲ賜ヒ退出ス。

同年十一月二十日内務省地理局事務擔任ノ命ヲ受ク。

同年十一月二十四日愛媛縣權令ニ任セラル。同年十二月七日舉家東京ヲ発シ愛媛縣ニ赴任ス。同月十八日伊豫國温泉郡松山町ニ着シ、一番町ノ旅舎ニ寓ス。本縣久シク縣令欠ク、參事江木康直縣務ヲ統轄ス。余着任前數日江木參事病死ス。依ツテ縣務ヲ權參事赤川懃助ヨリ受継キタリ。愛媛縣ハ伊豫一國ヲ管轄ス。戸數十六萬餘、人口七十萬。國稅金八十餘萬圓ヲ収ム。舊藩城址ハ松山、宇和嶋、大洲、吉田、今治、西條、小松、舊幕領川之江等ナリ。

## 自傳草稿

### 貳

明治八年六月五日、五等判事ヲ兼任ス。余行政官ニシテ、裁判官ヲ兼摂スルノ不可ナリヲ論シ、意見書ヲ添テ判事ヲ辞ス。同年八月七日兼官ヲ免セラル。是ヨリ先キ征韓ノ議行ハレザリシヨリ、板垣退助等野ニ在リ同志ノ士ト謀リ、民選議院設立ノ議ヲ政府ニ建議ス。亦容レラレス。此ノ時ニ當リ民權党ト稱スル者各地方ニ起リ、政府ノ擅恣ヲ憤慨シ、献白ニ演說ニ國內一時騷然タリ。政府地方官會議ヲ起シ國會ノ下院ニ擬ス。同年八月初メテ地方官會議ヲ東京淺草本願寺ノ別院ニ開ク。參議木戸孝允議長タリ。余等議員トナリテ此ノ會議ニ列ス。開會ノ日天皇陛下臨御勅語ヲ賜フ。議案ハ專ハラ土木事件タリ。會期三十日議事ヲ決了ス。同年九月町村會規則ヲ愛媛縣管内ニ施行ス。町村會議ヲ設置スルハ愛媛縣ヲ以テ本邦ノ嚆矢トス

明治九年四月六日、一昨七年佐賀縣暴動ノ際功勞ニ依リ賞ヲ賜フ。其文ニ曰ク、佐賀縣暴動ノ際速カニ赴任艱苦勉勵功勞不少、依テ其ノ賞トシテ別紙目錄ノ通り下賜ス。

### 一 目錄 金七百圓

又同日大久保大臣ニ清國ニ隨行盡カスルノ故ヲ以テ賞ヲ賜フ。其文ニ曰ク、大久保全權辯理大臣ニ隨行清國ニ出張中盡力候ニ付キ其賞トシテ別紙目錄ノ通り下賜ス。

### 一 目錄 縮緬代金百五十圓

同年五月香川縣ヲ廢シ、愛媛縣ニ合併セラル。依ツテ讚岐國高松ニ至リ、前香川縣權令新田義雄ヨリ縣務ヲ受領ス。讚岐國ハ戸

數十五萬餘、人口七十餘萬。國税金伊豫國ト相均シ舊藩城址ハ高松、丸龜トス。今ヤ愛媛縣ハ豫讃兩國ヲ管轄シ、戸數三十二萬ニ近く、人口百四十萬餘ニ上ル。國税金モ亦百五十餘萬圓ヲ収メ、沿海殆ント一百里、地方大縣ノ部ニ属セリ。讃岐國ニ愛媛縣支廳ヲ置キ、二等属藤野漸ヲ以テ支廳長トス。同年一月愛媛縣廳新宮ノ工ヲ起シ同年八月竣工九月移廳ス。同年十一月十九日長女清子<sup>キヨ</sup>生ル。

明治十年、西郷隆盛等乱ヲ起シ九州ノ地大ニ擾乱ス。我カ愛媛縣唯一海水ヲ隔ツルノミ、縣務多事日夜匆忙縣務ニ執掌ス。同年十二月松山町二番丁ニ地ヲ求メ家屋ヲ新築シ、翌年六月落成移居ス。

明治十一年四月、地方官會議ノ為メ東上議席ニ列ス。此ノ月内務卿大久保利通君凶徒石川縣人鳴田一郎等ノ為メ紀尾井坂下ニ殺害セラル。夫レ公ハ維新ノ元勳國家ノ柱石衆庶ノ依ツテ以テ重シトスル所天下ノ人惜マサル者ナシ。余公ニ知ラル、久シ、圖カラサリキ此ノ凶變ニ遇フ。痛嘆何ソ之ニ耐エン。朝廷公ノ勲功ヲ偉ナリトシ右大臣ヲ贈ラル。又國葬ノ大禮ヲ賜フ。伊藤博文、大久保公ノ後ヲ襲ヒ内務卿タリ。同年五月十五日、愛媛縣令ニ任セラル。同年八月初メテ愛媛縣會ヲ開ク、是モ亦本邦ノ嚆矢タリ。

明治十二年四月七日ニ女勝<sup>カツ</sup>子生ル。

茲歲初夏ヨリ虎列拉病大ニ流行シ豫防事務ニ従事ス。余モ亦同病ニ罹リ殆ント危キニ至ルモ幸ニ死ヲ免カレタリ。管下同病ニ罹ル者二万六千餘、死者二万ニ近シ、其慘状知ル可キナリ。同年十二月十五日、從五位ニ叙セラル。

〔此處ニ別紙ニ記述シアル愛媛縣地租改正ノ事項ヲ挿入ス〕

明治十三年二月東上、同三月八日内務大書記官ニ轉任シ、戸籍局長ヲ命セラル。判事関新平愛媛縣權令タリ。同月十八日事務引継キノ為メ愛媛縣ニ至ル。余在任茲ニ七年、圖カラス縣民ノ優遇ヲ受ク、官民大ニ送別ノ宴ヲ張ル。去ルニ臨ンテ三ヶ濱ニ來送スル者多く、先者三ヶ濱ニ至ルモ後者猶ホ松山ニ在ル者アリト云フ。三ヶ濱ニ至レハ蒸汽船和合丸埠頭ニ蟻シ余ヲ待ツ。舩數十皆ナ旗ヲ樹ツ中ニ就キ幕ヲ張り、五色ノ吹拔キヲ立ツルノ舟アリ。余ヲ之レニ上ラシメ數十ノ舩綱ヲ以テ其舩ヲ曳キ、舩頭一聲スレハ曳キ舩舩子之レニ應シテ舩歌ヲ唱エ本舩和合丸ニ達ス。本舩又宴ヲ設ケ惜別ノ情ヲ表ス。是レハ之レ昔時松山藩主

久松氏東都ニ趣ク時ノ式ニ擬スト云フ。此ノ舉ヤ豫メ秘シテ余ヲシテ知ラシメス、埠頭ニ至リ始メテ其ノ光景ヲ見一驚ヲ喫シタリ。船中宴半ハニシテ余簡單ニ衆人ニ謝シテ曰ク、余不肖本縣ニ令タル。茲ニ七年日月長カラサルニ非ス、然ルニ一ノ縣治ニ見ル可キ事無キ而已ナラス、諸君ノ援助ニ依ツテ大瑕ナキヲ得タルハ、余ノ大ニ諸君ニ謝スル所ナリ。今又去ルニ臨ンテ斯ノ優待ヲ受ク、何シノ光栄カ之レニ如カン。爾後益進ンテカヲ國家ニ盡シ他日聊カ諸君ニ報ユル所アラン事ヲ期ス。謹ンテ謝スト和氣洋々日暮衆人ト別カル。和合丸汽笛ヲ擧ケ東ニ向ツテ発ス。實ニ同年四月二日ナリ。神戸ニ上陸途次、京都ヲ過ク、偶松方内務卿京都ニ在リ特ニ大和・伊賀・伊勢地方沙防工事視察ノ命ヲ受ク、四月九日京都ヲ発ス。大坂ノ紳商住友吉左衛門、同家人加川勝美同行ス。此ノ日奈良ニ宿ス。夫レヨリ伊賀・伊勢・紀州・北牟婁郡等沙防工事ヲ巡了シ四月二十三日歸京、内務卿ニ復命ス。同年五月北豊嶋郡龍泉寺村ニ邸宅ヲ購ヒ之レニ居ル。此ノ邸ハ元吉原ノ娼家松葉樓ノ寮宅ニシテ維新後加賀前田家ノ所有トナリ、大ニ庭園ヲ修理シ見ル可キモノアリ。余ハ之レヲ西瀉訥ヨリ買求セリ。庭園山アリ水アリ松柏青蒼又頗ル景石ニ富ム。家大人常ニ來遊書画琴棋ヲ以テ樂ミトナセリ。後石川縣ニ赴任スルニ及ンテ原亮三郎ニ讓ル。同年九月十一日沖繩縣出張ノ命ヲ受ク。沖繩縣令鍋嶋直彬琉球固有ノ制度ヲ廢シ、新制ヲ施行スルニ方リ、大ニ嶋民ノ苦情ヲ釀成シ、嶋民直ニ政府ニ訴フル者アリ。内務卿余ニ命シテ實地ヲ視察セシム。内務屬熊谷薰郎ヲ隨カエ同月二十三日汽船廣嶋丸ニ便乗シ、横濱ヲ發ス。神戸ニ上陸琉球行ノ船ヲ待ツ。十月一日汽船黃龍丸ニ乗シ神戸ヲ出テ鹿兒嶋・大嶋等ニ寄港シ、同月十日琉球那霸港ニ達ス。則チ鍋嶋縣令ニ面シ内務卿ノ内旨ヲ傳エ且ツ縣治ノ詳細ヲ聴キ、互ニ其ノ得失ヲ議ス。又首里運天港等諸部落ヲ巡視シ、同月二十七日田子浦丸ニ乗シ那霸ヲ發ス。歸路又大嶋・鹿兒嶋・神戸ヲ經テ十一月八日横濱ニ入港、同日着京復命ス。

明治十四年六月十二日、三女恒生<sup>ツ子</sup>ル。同年七月二十七日、登記法取調委員ヲ命セララル。同年八月六日、豫讃兩國地租改正事業勲勵ノ故ヲ以テ左ノ賞與ヲ賜フ。

愛媛縣令奉職中地租改正事業勲勵候ニ付、為其賞別紙目錄ノ通り下賜ス。

一 目錄 白縮緬三匹

明治十五年一月十八日、府縣士族廢卒等授産資金ニ係ル樞密事務主任ヲ命セララル。同年六月十七日、勲四等ニ叙セラレ旭日小



綬章ヲ賜フ。同年七月二十二日、四女照生ル。同年八月五日、家人英俊翁東京北神保町家大兄通俊君ノ邸ニ長逝セラル。大翁歳七十有九身体健全温顔麗潤意氣豪然、常ニ壯者ノ及ハサル所ノ者アリ。惜ヒ哉、茲歳虎烈拉病流行測ラサリキ此ノ惡疫ニ侵カサレ施術百方終ニ起タス、病褥ニ在ル纔カニ二日、此ノ時大兄通俊君行旅北海道ニ在リ、有造君盛岡ニ謫居ス。余獨リ看護ニ待ス。更ラニ悲哀ノ情ニ堪エサリキ。通俊君急行歸京ス。谷中天王寺ノ墓地ニ葬ル。翁始メ貧家ニ人ト為リ萬艱ヲ排シ、苦学數十年大ニ主家ニ重用セラレ、遂ニ兵學ノ師範タルニ至ル。翁ノ德行一郷ニ周テク、人トシテ敬重セサルハナシ。又詩文書画ヲ能クシ、交友最モ多シ。余等三子其中ニ教養セラレ今日アルニ至ル。皆ナ翁ノ訓育ニ因ラサルハナシ。又忘ル可カラス。翁ノ逸事閱歴ハ別ニ書アリ、今茲ニ詳記セス。同年十一月十七日、登記法取調委員ヲ免セラル。同年十一月二十一日、登記法取調局事務取扱兼務ヲ命セラル。

明治十六年一月十九日、石川縣令ニ任セラレ月俸金三百圓ヲ賜フ。同年二月七日、東京ヲ発シ先ツ海路神戸ニ至リ、大坂・京都ヲ経テ大津ヨリ乗船湖水ヲ渡リ長濱ニ上陸、敦賀線ノ鐵道ニ依リ梁ヶ瀬ニ至リ下車ス。是ヨリ步行近江・越前ノ國境枋ノ木峠ヲ越ユ。道路險惡雪膝ヲ没ス。今庄・竹生・福井等ヲ経テ同年二月二十七日、石川縣下加賀國大聖寺町ニ着シ桂花樓ニ投ス。翌十八日、沿道各郡長等ノ来迎ニ接シ金澤町ニ達ス。官民數百市頭ニ迎フ。共ニ車ヲ連テ香林坊旅舎秋山ニ宿ス。前縣令千坂高雅、書記官園田安賢、警部長渡佳介等来會深更ニシテ去ル。翌十九日、園田書記官ト共ニ縣廳ニ至リ千坂高雅ヨリ縣政ノ引継キヲ受ケ各課ヲ巡視ス。石川縣ハ當時加賀・能登・越中三國ヲ管轄シ、戸數二十七萬強、人員百五十萬、國税金百八十餘萬圓ヲ収ム。而シテ金澤ハ前田氏ノ舊城址ニシテ富山大聖寺ハ前田氏ノ支族ナリ。共ニ城跡アリ。金澤市街戸數三萬ヲ有シ、人員殆ント十二萬、一旅團ノ衛戍アリ、第三師團ニ屬ス。眞ニ北陸ノ都府タリ。本縣ハ大縣ニシテ特ニ難治ノ稱アリ。其ノ因ツテ来ル所ノ者多々アリト雖トモ、中ニ就キ越中國ヲ併轄スルヲ以テ其主因ナル者ノ如シ。富山ハ元前田氏分族ノ領地ニ屬スル者多シ。從來本末ノ間人民常ニ相ヒ凌轢、且ツ近時地方税ノ制度ヲ設クルヨリ越中ハ大川多ク年々巨額ノ費金ヲ要ス。恰モ加賀・能登兩國ノ力ヲ以テ越中ノ堤防費ニ充ツルノ觀アリ。縣會ノ毎ニ紛擾止ム時ナキ者ハ實ニ之レニ基因ス。同年二月二十三日、前縣令千坂高雅内務大書記官ニ轉任シ金澤ヲ発ス。之ヲ郭外ニ送クル。同年三月十六日、通常縣會ヲ開ク。余ハ同月二十日、金澤ヲ發シ越中國ヲ巡

視シ專ハラ河川ニ係ハル土木ノ取調ヲ為セリ。同年四月十四日、縣會ヲ閉ツ。議案全体ヲ可決シ無事ニ閉會式ヲ舉クルハ本縣ニ於テ稀ナリト云フ。同年五月、関西府縣聯合競進會ヲ大坂ニ開ラク、之レニ臨ミ次ヒテ上京ス。同年五月二十三日、石川縣管轄越中國ヲ分割シ富山縣ヲ置カル。國重正文富山縣權令タリ。同年六月十二日、歸縣則チ越中國ニ屬スル簿書及ヒ各般ノ事件ヲ整理シ、同年七月一日、富山縣權令國重正文ニ送致ス。同年九月二十三日、書記官園田安賢内務省警保局ニ轉シ、徳久恒範石川縣書記官ニ任セラル。茲歲米穀稔ラス米價大ニ騰貴シ、加フルニ頻年金融ノ恐慌ヲ來シ、銀行ニ會社ニ皆ナ預入金ヲ引出スニ到レリ。

明治十七年ノ初メニ當リ經濟界ノ恐慌ハ愈益太甚シク、遂ニ金澤ニ在ル所ノ銀行會社三十六悉ク其ノ取引ヲ中止スルニ至ル。中ニ就キ北陸銀行ハ舊蕃時代ノ設立ニシテ、元金澤為替會社ト稱シ廢蕃後ト雖トモ、官廳ノ出納ヲ繼續シ未リシカ、積年ノ餘弊内部大ニ乱レ、巨額ノ金員欠損セリ。然レトモ市民ハ從來ノ確實ニ慣レ、其信用ヲ失ハサリシ。明治十七年一月、為替會社ノ組織ヲ改メ、私立北陸銀行ト改稱セリ。金澤ノ豪商木谷・鳴崎、越中ノ豪農宮林・藤井等專ハラ四名ノ設立ニ係ハル。然レトモ是レ一時ノ繙縫策ニ外ナラス。其ノ資本金ハ三十萬圓ナリト雖トモ預リ金ハ之レニ倍徙シ殆ント壹百萬圓アリト云フ。而シテ其ノ預リ金ハ大概貧困士族ノ預金最モ多キニ居ル。此ノ恐慌ハ遂ニ本銀行ニ及ヒ幾多ノ預入者一時ニ引き出シテ請求スルノ慘境ニ遭遇シ、銀行ノ資産ハ言フニ及ハス、株主ノ財産ヲ盡スモ猶ホ請求ニ應シ難キノ悲運ニ陥リ、其ノ窮狀見ルニ忍ヒサル者アリ。茲ニ於テ銀行ハ勿論、金澤市民舉ケテ救濟ヲ縣廳ニ哀願シテ止マス。此ノ恐慌ハ獨リ北陸地方而已ニ在ラスシテ、政府紙幣消却ノ制ヲ強行スルカ為メニシテ、内國一般此ノ悲境ヲ見ルニ至リシ者ナリ。是レ畢竟我カ政府紙幣増發ノ餘弊ニ基因ス。亦恐ル可キナリ。同年三月末、北陸銀行ノ資産ト負債ヲ調査セシムルニ二百ニ對シ僅カニ一ヲ償フニ當ル。預入者ノ困難モ亦察ス可キナリ。此クノ如キ資産ノ欠損アル所謂ノ者ハ、貸金抵當品ニ土地家屋多ク此ノ恐慌ニ際シ、一般其ノ價ヲ減シタル事實多キニ居ル。而シテ之レヲ救濟セントスル時ハ更ラニ數十萬金ノ出所ヲ求メサレハ其ノ幾分ヲ償フ事能ハス。何ヲ以テ此ノ大金ノ出ル所ヲ得可ケン。況ンヤ管内一般ノ恐慌唯一ノ北陸銀行ヲ救フノ不可ナルニ於テヤ。此ヲ以テ其共濟ノ至難ナルヲ懇諭スト雖トモ、如何ンセン數多ノ士民唯預金ノ利子ヲ以テ命トス。或ハ株主ニ迫リ、暴力ヲ加フル者アリ。銀行ノ閉鎖スルヲ聞クヤ發狂縊死スル者

アリ。或ハ井ニ投スル者アリ。其ノ甚シキニ至ツテハ妻子五人ヲ刺シ自刃スル者等日夜警察ノ報告ニ見ハル、慘情黙止スルニ忍ヒサル者アリ。此ノ時ニ方リ、能ク銀行會社ノ内實ヲ査察セシムルニ、北陸銀行ハ他ノ銀行會社ト大ニ其事情ヲ異ニスル者アリ。他ノ銀行會社ハ多く近時ノ設立ニシテ、商事上一般ノ恐慌ヨリ失敗ヲ来シタル者ナリ。之レニ反シ北陸銀行ハ最モ昔時ノ設立ニシテ廃藩置縣ノ際舊金澤藩トノ關係上已ニ巨額ノ欠損金アリ。且ツ士族ノ預金ニ對シ高利ヲ與エシ事實アリ。故ニ其ノ預入者ニ於テモ亦、預金全額ヲ得サルモ忍フ可キ意アリト云フ。前田家モ亦舊領士民ノ窮困、且ツ昔時為替會社トノ關係上多少救濟ノ義務ヲ有ス。猶ホ且ツ北陸銀行ヲ助クルモ他ノ銀行會社之レニ乘シテ救助ヲ請求セラル、ノ煩ナキヲ察知シ、先ツ株主ヲシテ十分ノ義務ヲ負擔セシメ、政府及ヒ前田家ニ訴エテ此ノ急ヲ救フ可キ事ヲ決意シ、是レヨリ屢東京ニ未往シテ遂ニ政府ニ於テ十萬、前田家ヨリ九萬圓ヲ得ルニ至レリ。猶ホ銀行ノ資産ト株主ヨリ更ラニ出ス所ノ金額ヲ合シテ殆ント四十餘萬圓ニ達ス。茲ニ於テ法ヲ設ケ先ツ仲裁人ヲ置キ、之レヲ北陸銀行鎖店殘務取扱人ト稱シ、石川昌三郎、神保三ノ兩名ニ依託ス。其ノ預リ金拂ヒ戻シノ方法ハ、公債証書預入者ニ八百ニ對シ二十五、現金預入者ニ八百ニ對シ二十ノ割トス。此ノ法ニ依リ拂ヒ戻シヲ望ム者ハ殘務取扱人ニ於テ速カニ拂ヒ戻シヲ為ス事ヲ公示ス。預入者大ニ喜ヒ争フテ之レニ應ス。茲ニ初メテ此ノ紛擾ヲ解ク事ヲ得タリ。此ノ舉ヤ獨リ北陸銀行債主負債主ノミニ止マラス、之レカ為メ間接ニ一般地方ノ融通ヲ圓滑ナラシメタルヲ以テ衆人余カ此ノ救濟事件ニ斡旋シタルヲ大ニ徳トスルニ至レリ。

預言者アリ曰ク、今年凶歲ナラン、往古ヨリ年順ヲ以テ例トスト、政府大ニ勤儉貯蓄ヲ勸獎ス可キヲ令ス。左ナキタニ去歲以來民間ノ疾苦ヲ目撃ス。余大ニ此ノ令ヲ翼賛シ、法ヲ設ケ吏ヲ派シ勤儉貯蓄ノ忽緒ニ附ス可カラサルヲ諭告ス。此ノ時ニ方リ、余ハ大ニ勸業教育ノ振興ヲ計ラント欲シ、先ツ米田ノ耕作法ヲ改良セシメン為メ、筑前ノ老農林遠里ヲ聘用シ、大ニ米作改良ノ事業ニ着手ス。遠里余カ熱心ヲ諒トシ喜ンテ事ニ從フ。農家モ亦能ク遠里ノ說ニ服ス。從來北陸地方霜雪ノ早キヲ以テ水田ニ間作ヲ施サ、ルヲ慣慣トス。遠里之レヲ看破シ麥或ハ菜種等ヲ水田ニ試作ス。成績最モ好シ。其ノ他撰種ノ法、播種・耕耘・施肥・乾燥・精米・牛馬耕ノ事ニ至ルマテ屢郡村ヲ巡回シ、講話或ハ農談會等ヲ催シ、懇口ニ學理ト實驗トニ依ツテ説示ス。又田區改正ノ法ヲ設ケ、畦畔ヲ減シ水路ヲ改善シ耕路ヲ改造シ、其ノ他農業器具ノ改良品ヲ使用セシムル等、諸般昔時ノ弊習ヲ一洗セリ。

遠里ノ説一般農家ノ信用スル所トナルヤ、爰ニ之レヲ擴張シ、遠里ノ門生十數人ヲ聘シ、之レヲ各郡ニ分派シ教習セシメタリ。年ヲ経スシテ大ニ米麥ノ增收ヲ見ルニ至ル。従来加賀・能登兩國水田一反ノ收穫、平均一石三斗餘ナリシニ改良着手ノ時ヨリ僅ニ六年ニシテ、一反平均二石餘ノ收穫ヲ得ルニ至レリ。又養蚕・製糸・製茶・陶銅漆器・織物等皆ナ地方有名ノ教師ヲ雇聘シ、其ノ改良ニ從事セシメ、其効モ亦大ナリ。又従来金澤町ニ在ル農學校ヲ能登國羽咋郡ニ移シ實業ヲ專習セシメ、傍ラ學理ヲ講セシム。又美術工業學校ヲ新設シ、納富介次郎ヲ以テ之レヲ管理セシメ、繪画・彫刻・刺繡・染色等総テ工藝ニ関スル諸般ノ業ヲ教授セシメ、年少子弟就業ノ便ヲ計レリ。又尋常小學校ニ實業ノ科ヲ設ケ専ハラ實業ヲ誘導スルノ道ヲ開ラキタリ。又尋常師範學校ヲ新築シ、又第四高等學校ヲ金澤ニ新設セラル、ヲ以テ一層教育ノ發達ヲ期スルニ至レリ。余石川縣ニ在職スル八年、同縣勸業教育ノ隆盛ヲ唱道スル者アルニ至ルヲ得タリ。

同年四月十七日、三男金三郎生ル。同年十一月二十一日、大聖寺出火ノ節金圓ヲ施與スルヲ以テ賞ヲ賜フ。其ノ文ニ曰ク、加賀國大聖寺町出火ノ節、罹災者エ金三拾圓施與候段、奇特ニ付其賞トシテ木盃壹個下賜候事。

明治十八年十月十五日、妻音瀨病死ス。是レヨリ先キ余縣下ノ西部ヲ巡視ス。此ノ日江沼郡山代村ノ小學校ニ在リ電信二個ヲ受ク。其ノ一ヲ見ル音瀨分娩死兒ヲ産スト、又其ノ一ヲ披ラク圖ラサリキ音瀨病死ノ凶報ナリ。愕然夢ノ如ク一時神心ヲ失フ。急ニ車ヲ命シ金澤ニ歸ル。幼兒皆ナ門ニ迎エ悲泣シテ止マス。其ノ慘狀言フニ耐エサル者アリ。次ヒテ死室ニ入り遺骸ヲ見更ラニ懷舊ノ情ニ耐エス。余死者ヲ撫シ謂ツテ曰ク、余汝ト婚スル已ニ十有七年、余ハ専ハラ外ニ國事ニ奔走シ汝獨リ内事ヲ理シ、常ニ勤儉ヲ守リ數兒ヲ撫育シ、余ヲシテ内顧莫カラシメ、以テ余カ今日アルヲ致ス。抑汝カ力ナリ。余汝ニ先タツ固ヨリ其ノ所今忽然余ト數兒ヲ棄テ去ル。余カ心事如何ソヤ、然レトモ人生ハ朝露ノ如シ。亦如何トモスル事ナシ。爾後只汝カ冥福ヲ祈リ、又汝ニ代リ數兒ヲ撫育ス可シ。汝夫レ瞑セヨト坐ニ在ル者皆ナ慘然タラサルハナシ。余興家未タ死者ナシ夫妻曾テ約スルアリ。余先キニ死ス、祭ルニ神ヲ以シ、汝先ンスル佛ヲ以テセント、即チ其ノ約ヲ履ミ眞宗大谷派本願寺ニ依リ同月二十四日、葬儀ヲ行ヒ金澤城南野田山ニ火葬ス。長男透東京ヨリ來リ喪主タリ。會葬スル者千ヲ以テ數フ。亦死後ノ榮ト謂フ可シ。後チ白骨ヲ京都東本願寺ノ須彌壇下ニ納メ、又胴骨ヲ京都東大谷特別墓地武家墓ト稱スル所ニ埋メ墓標ヲ建ツ。越エテ明治十九年一周年

忌ヲ以テ其遺灰ヲ金澤市大谷派本願寺別院内ニ埋メ、石碑ヲ立ツ。其碑名等ヲ左ニ記ス。

石川縣知事岩村君夫人華岡氏碑

是爲石川縣知事正五位勲四等岩村公夫人碑、夫人諱ハ音瀬華岡氏、天資靜淑能執婦道、明治維新之際公勤勞王事奮身勵忠屢建勲功、時或久外留而不歸、夫人居守撫子女御僕從肅而不礪和而不緩、少長皆畏服之其修身也、皆有法度蓋內助之功比古賢婦不多讓焉、夫人病公適巡部還則已沒矣、年三十有二、實明治十八年十月十五日也、越十日茶毗于金澤南野田山、後數月瘞骨京都府東願寺須彌壇下、釋号雅亮院尼妙音生三男四女、長透次圓次金三郎四女皆不筭十九年十月透更瘞其遺灰

婦德之盛 人皆稱揚 其壽雖短

其名不亡 明治十九年十月

元老院議官兼内閣書記官長陸軍少將從四位勲二等田中光顯題

藤田維正撰 野崎近彝書

同年十二月十一日、昨年八月縣下暴風雨ノ節、金圓ヲ施與スルヲ以テ賞ヲ賜フ。其ノ文ニ曰ク、

明治十七年八月、暴風雨ノ節、加賀國河北郡白尾村外四ヶ村及ヒ江沼郡塩屋村罹災者エ金三十拾圓施與候段、奇特ニ付其ノ賞トシテ木盃壹個下賜候事。同年十二月十五日、更ラニ石川縣令ニ任セラレ勅任ニ進メラレ月俸金三百五十圓ヲ賜フ。

明治十九年七月八日、正五位ニ叙セラル。同年七月十九日、官制改正更ラニ石川縣知事ニ任シ、勅任官二等ニ叙セラレ下級俸ヲ賜フ。茲歲初夏ヨリ虎列拉病流行シ檢疫事務ニ従事ス。同年七月余腸窒布斯病ニ罹リ病蓐ニ在ル事四旬病勢最モ劇惡、幸ニシテ又九死ヲ免カル、ヲ得タリ。同年九月十九日、眞田庵ノ次女乙猪ヲ嫁リ東京ニ於テ結婚ス。同年八月二十八日、從四位ニ叙セラル。茲歲初夏地ヲ金澤ノ城南柿ノ木畠ニ求メ家屋ヲ新築シ十二月竣成移居ス。

明治二十年三月、長男透ヲ米國ニ留學セシム。之ヲ横濱ニ送ル。同年十一月二十五日、勲三等ニ叙セラレ旭日中綬章ヲ賜フ。

明治二十一年三月二十五日、四男尚俊生ル。同年六月二十五日、庶子長男健造生ル。

明治二十二年二月十一日、紀元節ノ祝日ヲ以テ大日本帝國憲法ヲ發布セラル、ノ大詔出ツ。是レ本邦未曾有ノ大典、余其ノ式

ニ參列ノ榮ヲ賜ヒ召サレテ東上ス。同年二月四日、又左ノ命ヲ受ク。

今般憲法發布并ニ皇室典範御治定ニ付、奉告ノ為メ奉告祭執行ニ付、石川縣管内國幣社エ勅使トシテ參向ヲ命ス。

余ハ參列ノ為メ上京スルヲ以テ、書記官徳久恒範ヲ代理トシテ參向セシメタリ。憲法發布式ノ當日、則チ二月十一日ニ至レハ朝野ノ人士皆ナ天皇陛下ノ萬歳ヲ祝シ、市街ハ毎戸國旗紅燈ヲ懸ケ、又種々ノ飾リ物ヲ出シ大典奉祝ノ意ヲ表ス。之レ唯東京ノミニ在ラスシテ帝國一般此ノ盛況ヲ呈シタリ。余等當日大禮服ヲ着シ午前九時宮城正門ヨリ入り先ツ賢所ニ至リテ、聖上御拜ノ後チ階下ニ於テ列聖ノ神靈ヲ奉拜シ、同十一時宮城正殿ニ昇リ大典式場ニ參列ス。有司百官内外國人ノ參列并ニ參觀ヲ賜フ者正殿ニ滿ツ。須臾ニシテ音樂起ル。是レト同時ニ天皇皇后両陛下出御、憲法數十條ヲ時ノ内閣總理大臣伊藤博文ニ下附セラル。式全ク終リ衆皆ナ退ク、是レヨリ觀兵式ノ陪覽ヲ賜ヒ、青山練兵場ニ至ル。聖上皇后御同乘式場ニ臨御諸兵分列式ヲ行フ。天皇親シク觀兵ノ式ヲ舉ケサセラル。終ツテ還御衆皆ナ散ス。同日午後七時宮城ニ於テ大宴會ヲ催サセラレ大典參列參觀者ニ陪宴ヲ賜フ。宴終リ本邦古代ノ舞樂ヲ陪覽ス。余等此ノ盛典ニ列スル、實ニ千載ノ一遇ナリ、市民皆ナ業ヲ休ミ戸々祝盃ヲ舉ケ、市街雜沓人々皆ナ狂スルカ如シ。此ノ日文部大臣森有禮、西野文太郎ノ毒手ニ斃ル惜ム可キナリ。同年十月一日、神苑會石川懸委員長ヲ同會頭吉井友實ヨリ囑託セラル。同年十一月二十五日、大日本帝國憲法發布紀念章ヲ賜フ。

明治二十三年三月二十六日、嚮キニ第四高等中學校創立費トシテ金三百五十圓ヲ寄附シタルヲ以テ賞ヲ賜フ。其ノ文ニ曰ク、第四高等中學校創立費トシテ金三百五十圓寄附候段、奇特ニ付其ノ賞トシテ木盃三組壹個下賜候事。同年三月十四日、福井縣新道開鑿費ノ中エ金員寄附ノ賞トシテ木盃壹個ヲ賜フ。其ノ文ニ曰ク、

越前國南條郡武生驛ヨリ敦賀港ニ通スル新道及ヒ若狹國遠敷郡須賀美峠大飯郡吉坂峠開鑿費トシテ金五拾圓寄附候段、奇特ニ付其ノ賞トシテ木盃壹個下賜候事。

同年四月濃尾三三國地方ニ於テ近衛并ニ第三師團第四師團、及ヒ艦隊ヲ交エ陸海軍大演習ヲ舉行セラル。天皇陛下統監在ラセ賜フ。右大演習陪覽并ニ名古城ニ催サル、大宴會ニ召サレ、名古屋ニ至ル。四月一日ヨリ同三日ニ至ル大演習ヲ陪觀シ、同三日ノ夜宴ニ陪坐ス。同年四月七日、京都疏水工事ノ落成式ヲ舉ク。京都府知事北垣國道ノ招待ヲ受ケ京都ニ至ル。天皇陛下臨御、其

ノ式頗ル盛大ナリ。同日余等大津ニ至リ乗船疏水ヲ下リ蹴上ケニテ揚陸、直チニ岡崎ノ式場ニ至リ式ニ列ス。其ノ夜夜會ヲ設ケ宴ヲ張ル。水上舟ヲ泛ヘ烟火數千、種々ノ餘興アリ、夜景最モ好シ。深夜辭シテ三條木屋町ノ旅舎ニ宿シ、翌日出発歸縣ス。同年五月二十一日、愛知縣知事ニ任セラレ。勅任官ニ等ニ叙セラレ、下級俸ヲ賜フ。同年六月三十日、舉家金澤ヲ發シ、名古屋ニ赴任ス。余石川縣ニ在職スル、茲ニ八年知友頗ル多シ、去ルニ臨ンテ大ニ鄭重ノ禮遇ヲ受ク。金澤ヲ發スルノ日郊外ニ未送スル者官民數多各學校生徒モ亦未送セリ。或ハ郊外ニ別レ、或ハ數里遠ニ縣界ニ至リ別ル、者アリ。六月一日、名古屋笹鳴ノ停車場ニ着ス。前愛知縣知事白根專一、書記官柳本直太郎、其ノ他師團將校、裁判官、市長、縣市會議員ヲ始メ有志者各學校生徒等ノ未迎ヲ受ケ旅館秋琴樓ニ投ス。新石川縣知事船越衛ト豫メ名古屋ニ會スルヲ約シ、共ニ秋琴樓ニ在リ。則チ石川縣政ヲ船越新知事ニ引キ繼ク。翌二日愛知縣廳ニ出仕シ、廳内各課ヲ回視ス。此ノ日前愛知縣知事白根專一ヨリ縣政ノ引継キヲ受領ス。愛知縣ハ尾張三河兩國ヲ管轄シ、戸數二十三萬餘戸、人口百三十七萬餘。國稅金二百萬圓餘ヲ収ム。而シテ名古屋市ハ舊徳川候ノ城址ニシテ、城上金鯨耀キ名城タリ。今現ニ帝室ノ離宮ト成ル。市街戸數四萬餘戸、人口十六萬餘トス。第三師團アリ、名古屋控訴院アリ、四通八達三都ニ亘ク繁榮ノ地タリ。近時鉄道ノ便開ラケシヨリ、行客頻繁貨物ノ輻湊將來都府ヲ凌駕スルノ勢アリ。前知事白根專一内務次官ニ轉任シ東上スルヲ以テ、之レヲ笹鳴ノ停車場ニ送ル。同年七月一日ヲ以テ初期衆議院議員ノ選舉ヲ行フカ為メ其ノ準備ニ忙ハシ。又前々知事勝間田稔創設ニ係ハル事業中複雑其ノ局ヲ終エサル者十有四件アリ。專ハラ其ノ整理ヲ計ル等縣務多事退廳毎ニ深夜ニ至ル。本縣モ亦縣會ニ難事アリ。市郡經濟ノ分離、尾三兩國ノ軋轢ニ基因ス。毎年通常縣會ノ閉會式ヲ舉ケタル事ナシト云フ。同年六月二日、日本赤十字社總裁彰仁親王殿下ヨリ左ノ謝狀ヲ拜ス。

日本赤十字社石川縣支部長囑託中社業擴張ノ為メ其ノ盡力少ナカラス、仍ツテ本社ニ代リ其ノ厚志ヲ謝ス。

同年六月七日、帝國水難救濟會總裁威仁親王殿下ヨリ左ノ章ヲ下與セラレ。

爰ニ從四位勲三等岩村高俊氏博愛厚義ノ主旨ニ協同セラレ、ヲ以テ會則ニ照シ正會員ニ列ス。

同年七月、貴族院多額納稅者議員ノ互選選舉ヲ執行シ、又衆議院議員ノ選舉ヲ行フ。同年七月三日、嚮キニ石川縣下能登國珠洲郡飯田町失火ノ際金員ヲ寄附シタルノ賞トシテ木盃壹個ヲ賜フ。同年七月二十九日、庶子長女國生マル。同年十月、臨時縣會ヲ

開ラキ開會七日ニシテ閉會ス。同年十一月二十五日、初期帝國議會ヲ召集セラル。議會開院式ニ參觀ヲ賜ヒ上京ス。同月二十九日、開院ノ式ヲ舉ケラル。貴衆兩院議長議員及ヒ參觀ノ内外國人參院聖駕ヲ迎フ。天皇陛下開院式場ニ臨御開院ノ勅御ヲ賜フ。貴族院議長伊藤博文之レヲ拜受ス。式終ツテ皆ナ退散ス。同年十二月八日、天皇后兩陛下ノ御真影ヲ下賜セラル。

明治二十四年一月通常縣會ヲ開ク。農工業獎勵費ノ議案可決スルヲ以テ農業ニハ林遠里及ヒ美術工藝、意匠考案家トシテ塩田惠等ヲ雇聘シ、大ニ農工業ノ發達ヲ計ル。又私立幼稚園ヲ設立セシム。同年五月九日、勅任官一等ニ陞叙セラル。同年同月二十七日、從三位ニ叙セラル。同年六月二十六日、左ノ賞與ヲ受ク。

明治十九年石川縣下虎列拉病流行ノ節、貧困患者救助トシテ金圓寄附候段、奇特ニ付其ノ賞トシテ木盃一個下賜候事。

同年八月、皇太子殿下名古屋ニ行啓、第三師團ノ觀兵式ヲ行ハセラル。余等モ又陪覽ノ榮ヲ賜フ。市民打球烟火等ヲ以テ餘興ニ供フ。二日御滯泊、御發車ニ臨ミ桂師團長、余兩名ヲ召サセラレ御物ヲ賜フ。御避暑ノ為メ二見浦ニ成ラセラレタリ。同年八月十六日、多年ノ勤績ニ依リ年俸八分一ヲ増賜セラル。同年十月十七日、五男金城生マル。同年同月二十八日、美濃・尾張ニ一大地震アリ。余此ノ時地方官ノ會同ニ依リ東京ニ在リ。同日午後七時、書記官典獄等ノ電報ニ接シ、同夜十時新橋ヲ発シ歸途ニ上ル。濱松以西汽車通セス徒歩名古屋ニ歸ル。鳴海驛以北橋梁落ち、道路龜裂シ湧水甚シ、熱田名古屋全市街家屋半ハ倒レ大ヒナル被害ニ非サルモ、瓦落チ壁崩レ家々皆ナ道路ニ露宿ス。亦前日ノ觀ナシ。直ニ縣廳ニ至ル。廳舎ハ幸ニ倒壞ノ害ヲ免カレタリト雖トモ、諸處ノ破損夥シク時ニ大小ノ震動今猶ホ止マス。庭園仮屋ヲ設ケ、常務ヲ廢シ徹夜專ラ救恤ニ従事ス。縣下各地被害ノ厚薄ハ北スルニ從ヒ、其ノ害多ク、郡ヲ以テ計フル時ハ羽栗・中嶋・海東ノ三郡ヲ以テ最トス。家ヲ倒潰スル十有餘萬、死傷殆ント五千ニ及フ。其ノ他鐵道・道路・堤防・橋梁等ノ破潰擧ケテ數フ可カラス。又田畑山地龜裂湧水ノ害最モ甚シク其ノ慘狀實ニ名狀ス可カラサルナリ。幸ニ火ヲ失スル稀レニシテ、其ノ震災ニ於ケルモ之レヲ岐阜縣ニ比スレハ災害半ハナリトス。同年十一月一日、時ノ内閣總理大臣伯爵松方正義未縣、被害地ヲ巡視ス。余之レニ随伴各地仮設ノ病院ニ至リ負傷患者ヲ慰問シ、且ツ郡村長等ヲ召集シテ救助ノ事ヲ謀リ、專ラ善後ノ策ヲ講セリ。又松方總理大臣ニ從ヒ、岐阜ニ至リ小崎知事ト共ニ災害救濟ノ方法ヲ議シ互ニ大差莫カラン事ヲ期ス。松方總理大臣ハ岐阜縣災害地ヲ回檢ス。余ハ大臣ニ先チ歸廳シ專ハラ災害調査ニ従事ス。



松方総理大臣再ヒ名古屋ニ来リ救済ノ方針順序ヲ授ケ、同五日歸京ス。是ヨリ常ニ暁出夜勤属僚ヲ督シ孜々トシテ整理ニ努ム。小松宮彰仁親王殿下、天皇陛下御名代トシテ愛知・岐阜両縣罹災地ヲ御巡視在ラセラル。各地方慈善者寄贈ノ金品頗ル多シ。同年十二月ニ至リ震災ノ調査粗ホ結了、救治ノ方法モ又備ハリ、臨時縣會ノ決議ヲ經テ之レヲ政府ニ具申シ、國庫ノ補助ヲ申請ス。是レカ為メ東京ニ往復スル再三、遂ニ震災救済及ヒ復舊土木費トシテ前後合シテ殆ント二百萬圓并ニ中央備荒儲蓄金五十萬圓ノ補助ヲ得タリ。加フルニ特志慈善者ノ寄贈ニ係ハル金員二十萬圓、又本縣ノ備荒儲蓄金五萬圓ノ支出アリ。金額總計二百七十五萬圓、之レヲ以テ罹災者ノ救済道路、堤防、橋梁等ノ修築大約其ノ目的ヲ達スルヲ得ルニ至レリ。

明治二十五年一月九日、東上ス。余近年腦病ニ罹リ時々之レニ苦ム。大震ノ事變アリテヨリ、日夜鞅掌勤務ノ為メ大ニ腦疾ヲ重加セリ、且ツ時事ニ鑑ミル所アリ。其ノ意ヲ具陳シ退官ヲ内請ス。同年一月十五日、非職ヲ命セラレ、又同日左ノ辭令ヲ受ク。貴族院令第一條四項ニ依リ貴族院議員ニ任ス。和歌山縣知事千田貞暁代リテ愛知縣知事ニ任セラレタリ。即チ縣政ヲ千田知事ニ引繼ク。同年一月二十五日、日本赤十字社總裁宮殿下ヨリ左ノ謝狀ヲ受ク。

日本赤十字社名古屋支部部長囑託中社業擴張ノ為メ其盡力少ナカラス仍ツテ本社ニ代リ其ノ厚志ヲ謝ス。同年一月二十九日、名古屋ヲ去ツテ京都ニ移ル。名古屋ヲ去ルニ臨ンテ、師團將校、縣官裁判官等大ニ送別ノ宴ヲ設ケ、又贈クルニ物ヲ以テセラレ、最モ厚キ禮遇ヲ受ク。余笹嶋ノ停車場ニ至ル。官民各學校生徒等未送スル者頗ル多シ。汽笛一聲衆人ト袂ヲ分チテ去ル。同日京都ニ着シ上京區油小路一條下ル處ノ仮寓ニ静居ス。同年二月二十三日、庶子二女満生マル。同年二月職ヲ辭シ、同三月十一日非職愛知縣知事ノ官ヲ免セラレ。同年三月十三日、愛知縣縣會議長内藤魯一、愛知縣民ヲ代表シ遠ク京都ニ来リ余ヲ名古屋ニ迎エ慰勞送別ノ宴ヲ張り、又贈クルニ紀念ノ盃等ヲ以テシ、席上内藤議長愛知縣民ヲ代表シ慰勞ノ辭ヲ朗讀セリ。余不肖敢テ當ルニ非サルモ爰ニ其ノ辭ヲ掲ク。我カ國縣ノ治メ難キモノ若干アリ。我カ愛知縣ノ如キ蓋シ亦其ノ一ナラン維新置縣以未愛知縣ニ主治タル者前後數人。其ノ才敏ナラサルニ非ス、其ノ智明ナラサルニ非ス。而シテ令聞高譽能ク終始アル者ニ至ツテハ、則チ殆ント見ルニ苦シム。其ノ故何ソヤ。魯一等等常ニ謂ラク、愛知縣ノ治メ難キハ其ノ民ノ野ナルカ為メニ非ス。寧口其ノ達ナルカ為ナリ。其ノ矇ナルカ為メニ非ス。寧口慧ナルカ為メナリ。野ト矇トハオト智トヲ以テ尚ホ之レヲ治ム可シ。慧達ノ民ニ至ツテハ

徳ト誠ニ非スハ竟ヒニ之レヲ服セシムル事能ハスト。夫レ才智ノ人世尚ホ之レアリ、誠徳ノ人ニ至ッテハ之レヲ得ル甚タ難シ。是レ豈ニ愛知縣ノ主治者ニシテ令聞高譽ヲ受ケタル者少ナキ所以ニ非スヤト。伏シテ惟フニ前縣知事岩村高俊君ハ、明治二十三年五月ヲ以テ本縣知事ニ任シ、本年一月十五日ニ至ルマテ在職二年ニ足ラス。而シテ君就職以テ未銳意熱心廳中ノ積弊ヲ洗除シ、警察ニ土木ニ監獄ニ教育ニ勸業ニ嚴ニ屬僚ヲ率ヒ細カニ事務ヲ理シ、着々トシテ改良ノ方針ヲ取ル。其ノ積ノ見ル可キ者固ヨリ少ナカラス。能ク縣論ノ在ル所ヲ重シ、能ク縣會ノ意見ヲ容レタルカ如キハ、魯一等ノ頗ル満足ヲ表スル所ナリ。殊ニ昨年十月二十八日ノ大震災ニ處シ、君身ヲ以テ衆ニ先シ、善ク量リ善ク斷シ、刻苦畫策日夜ヲ問ハス、是レ魯一等ノ深く感謝スル所ナリ。震災ノ善後策ニ至ッテハ未タ其ノ全キヲ得スト雖トモ、其ノ能ク今日アルヲ致シタル所謂ノ者ハ、抑モ君カ國家ニ忠ニシテ縣民ヲ愛スルノ徳ト誠トニ由ルニ非スハ、安ソ能ク斯クノ如クナルヲ得ンヤ。是ニ於テカ知ル、苟モ徳ト誠ヲ以テセハ愛知縣ノ治ニ難カラサル事ヲ君ノ如キハ實ニ將末ニ主治者タル者ノ模楷ト為ス可シ。君劇務ノ為メ脳疾ニ罹ラレ、其ノ職ヲ辞セラ。君ノ身ヲ養ヒ心ヲ間ニスル或ハ然ラン。而モ魯一等深く遺憾トスル所ナキ能ハス。爰ニ縣下一市十九郡ノ人志ハ本日ヲ以テ、遠ク君ヲ迎エ聊カ一片慰勞ノ微意ヲ表セントスルニ當リ、君ハ其ノ禮ノ厚カラス饗ノ至ラサルヲ以セス、惠然トシテ駕ヲ扞ケラル。光榮ヲ辱フス。魯一等誠ニ欣喜ノ至リニ堪エス、依ッテ會衆一同ニ代リ敢テ一言ノ蕪辭ヲ呈ス。

會場ハ名古屋城西ノ金城館ニシテ會衆二百餘名、開宴中盛ンニ烟火ヲ放揚シ興ヲ添エタリ。宴酣ニシテ余ハ一片ノ謝辭ヲ演述シ去ッテ設ケノ宿舎ニ投ス。翌日名古屋ヲ發シ京都ニ歸ル。同年四月二十六日、恩給年額金千六十七圓ヲ受ク。同年舊大内ノ西一條油ノ小路ニ地ヲ購ヒ屋舎ヲ新築ス。九月工ヲ起シ翌年三月竣成、之レニ移ル。昨年十二月衆議院解散セラレ本年二月十五日、總選舉ヲ行ヒ、同年五月五日、臨時帝國議會ヲ開カル。余始メテ貴族院ノ議席ニ上ホル。

明治二十六年一月二十日、左ノ賞ヲ受ク。

明治二十四年十月震災ノ節、愛知縣下被害者救助トシテ金百圓施與候段、奇特ニ付其ノ賞トシテ木盃壹組下賜候事。

同年六月七日、庶子ニ男仙彌生マル。

同年七月八日、左ノ囑託ヲ受ク。

平安遷都千百年紀念祭協賛會會長ハ、同會規約第十一條ニ因リ、會員岩村高俊氏ヲ本會評議員ニ推舉ス。予ハ其ノ適任ナルヲ信シ茲ニ之レヲ囑託ス。同年八月一日、長女清子、大坂市大三輪長兵衛嫡男大三輪奈良太郎ト結婚ス。

明治二十七年三月八日、左ノ褒詞ヲ受ク。

明治二十四年十月震災ノ節、愛知縣下被害者エ救助トシテ衣類四十七点施與候段、奇特ニ候事。同年八月十六日、五女嵯峨生マ  
ル。

茲歲初春ノ頃ヨリ、我カ國朝鮮國ニ對スル施為ニ関シ、清國政府ハ頻リニ之レニ抗議シ、我カ國ノ朝鮮獨立扶植ノ業ヲ妨ケ、甚シキニ至ツテハ我カ居留民ヲ威嚇排斥セントスルノ舉アリ。我カ政府淳ニ其非理ヲ論シ、清國ニ向ツテ反正ヲ促カスト雖トモ、彼レ猶ホ顧ミル所ナキ而已ナラス、東學党ノ起ルニ臨ンテ朝鮮ハ清國ノ保護國ナリトシ、兵ヲ朝鮮ニ派遣スルニ至ル。夫レ朝鮮國ハ一獨立國タル事、數次ノ談判ニ於テ各國明カニ之レヲ認ム。又天津條約ニ於テ、彼我朝鮮ニ兵ヲ出サントスルトキハ、互ニ知照スルノ條項アリ。然ルヲ今此ノ暴舉ニ出ツ。我カ國焉ソ之レヲ默視スル事ヲ得ンヤ。遂ニ問罪ノ師ヲ出シ、大ニ清國ノ罪ヲ正サントスルニ決シ、宣戰ノ大詔ヲ内外ニ煥發シ、陸海軍ヲ督シ進發セシム。同年八月大轟ヲ廣嶋ニ進メラレ、天皇親カラ軍機ヲ裁シ賜フ。同年十月十五日、臨時帝國議會ヲ廣嶋ニ召集セラレ、軍費壹億五千萬圓ノ支出ヲ議ス。余モ亦召集ニ應シ議席ニ列ス。議事三日ヲ出スシテ可決ス。國民ノ義膽推シテ知ル可シ。我カ軍ノ朝鮮京城ニ入ルヤ、清兵已ニ牙山ニ屯營ス。是レヨリ陸軍ハ戰端ヲ成歡ニ開ラキ、牙山ノ兵ヲ敗リ、海戰ハ豐嶋ニ始マリ黃海ニ大捷ヲ得、大同・鴻綠ニ水ヲ渡リ、平壤ノ堅城ヲ拔キ、旅順ヲ夷ケ、威海營ヲ落シ、殆ント東清ヲ席卷シ、破竹ノ勢ヲ以テ直チニ清都北京ニ逼マラントスルニ至ル。此ノ役二十七年ノ春ニ起リ、越エテ翌二十八年ノ初夏ニ及フ。余京都ニ閑卧靜養スル事已ニ三年、山紫水明ノ間ニ逍遙シ、大ニ宿痾ノ輕快ヲ覺フ。時ノ内務大臣子爵野村靖、余ニ福岡縣知事タラン事ヲ内諭ス。余既ニ仕官ノ念ヲ断チタリシモ、日清交戦ノ大事起リ、知己朋友多クハ遠征ニ從ヒ國事ニ盡碎ス。此ノ時ニ在リ靜卧徒食大ニ良心ニ恥ツ。顧フニ福岡縣ハ今回ノ軍事ニ關係ヲ有スル所、又聊カ國家ニ盡ス所アル可シト。依ツテ就官ノ内意ヲ野村子爵ニ通ス。

明治二十八年四月十九日、福岡縣知事ニ任セラレ、高等一等ニ叙セラル。前福岡縣知事岩崎小次郎病ヲ以テ東京ニ在リ。同年

五月五日、京都ヲ発シ任地ニ赴ク。神戸乗船直航門司ニ至ル。福岡縣書記官緒方道平、警部長安立綱之等門司ニ迎フニ會ス。石田屋ニ少憩シ九州鐵道ニ乗シ、博多停車場ニ着ス。官民迎フル者多シ。福岡市中鳴町京屋ニ投シ、後千官邸ニ移ル。同月九日、福岡縣廳ニ出、緒方書記官前知事ノ代理ヲ以テ縣政ノ授受ヲ了ス。其ノ日廳内ノ各部各課ヲ回視ス。福岡縣ハ筑前・筑後・豊前ノ中四郡ヲ管轄ス。戸數三十二萬餘、人員百三十萬餘ヲ有シ、國稅金二百餘萬圓ヲ収メ地方大縣ノ部ニ屬ス。而シテ市制ヲ施行スル二個所福岡・久留米トス。福岡市ハ黒田侯、久留米ハ有馬伯ノ舊城址ナリ。其他小倉ハ小笠原伯、柳河ハ立花伯ノ舊城下ニシテ共ニ大市街タリ。又門司・若松・博多・若津等ノ數港アリ。中ニ就キ門司・若松ハ近時石炭ノ輸送盛ンニシテ、大ニ繁昌ヲ極ム。小倉・門司・若松共ニ近キ將來市制ヲ設クルノ地タル可シ。同年四月二十三日、日本赤十字社總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。日本赤十字社福岡支部長ヲ囑託ス。日清ノ戰爭毎ニ我カ軍勝利ヲ得、清國ノ兵力殆ント燼滅ス。此ニ於テ清國政府ハ李鴻章ヲ大使トシ、未テ和ヲ請フ。我カ政府ハ伊藤伯、陸奧子ヲシテ馬関ニ和議ヲ講セシム。馬関ト門司ハ唯一葦水ヲ隔ツルノミ。此ノ間内外ノ耳目和議如何ニ集中シ、浮説流言其ノ間ニ行ハレ、有志ノ士來往頻繁頗ル嚴重ノ取締ヲ要ス。遂ニ馬関・門司兩地ニ戒嚴令ヲ布カレ、更ラニ警戒ヲ嚴密ニシ憲兵警官ヲ以テ兩地ヲ滿タスニ至ル。圖ラサリキ狂漢其ノ隙ヲ窺ヒ、大使李鴻章ヲ途ニ要撃シ、彈丸面部ニ入り負傷セシメタルモ、幸ニ輕傷大事ニ及ハサリキ。是レカ為メ山口縣知事原保太郎其ノ他警部長等官ヲ免セラル、者アルニ至ル。和議談判中ニ在リシモ軍隊并ニ軍需品ノ輸送益多キヲ加フ。馬関海峡艦船海ヲ掩フ、李大使見テ以テ一驚ヲ喫スト云フ。和議漸ク成リ、遠征ノ軍漸次凱旋。同年七月第六師團モ亦凱旋ス。我カ福岡・小倉共ニ聯隊ノ屯營アリ。黒木第六師團長其ノ他軍隊ノ門司港ニ歸着スル毎ニ大ニ歡迎ノ宴ヲ催フシ、遠征ノ勞ヲ慰メタリ。當時門司港ニ於ケル艦船ノ出入頻繁ヲ極メ、且ツ支那沿岸虎列拉病ノ流行アリ。馬関并ニ門司ニ檢疫所ヲ設置シ、上ハ將校ヨリ兵卒軍夫ニ至ルマテ一々健康診斷ヲ行フ等其ノ混雜名伏ス可カラサルモノアリ。同年十月ニ至リ漸ク平常ニ復スルヲ得タリ。

同年十月十五日、大日本武徳會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

大日本武徳會地方委員長ヲ囑託ス。

同年十一月十三日、大日本水産會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

大日本水産會福岡支會長ヲ囑託ス。

同年十二月十二日、官幣小社竈神社御昇格ニ付奉告祭。勅使トシテ同神社ニ參向仰付ラル。同年十二月二十八日、日本赤十字社總裁宮殿下ヨリ左ノ御沙汰アリ。

爰ニ從三位勲三等岩村高俊氏征清ノ戰役ニ際シ本社救護ノ業務ニ盡瘁セラル、特ニ功勞アルニ依リ、推薦シテ特別社員ニ列シ、以テ之レヲ表彰ス。又別ニ金製鳳紋赤十字章手釦ヲ贈與セラル。

明治二十九年三月十日、左ノ褒詞ヲ受ク。

明治二十五年紀伊國東牟婁郡熊野沖遭難漁民工金圓賑恤候段、奇特ニ候事。

同年三月三十一日、左ノ賞ヲ賜フ。

明治二十七・八年事件ノ功ニ依リ全五百圓ヲ下賜セラル。

今茲ニ特筆記述ス可キ事アリ。明治二十九年六月五日、華族ニ列セラレ、男爵ヲ授ケラレタル事はレナリ。家大兄通俊君モ亦同時ニ此ノ榮爵ヲ賜フ。當日午前十時參内ス、同十一時親授式ヲ行ハセラル。則チ式部長ノ先導ニ依リ、玉坐ニ進ム。土方宮内大臣、徳大寺從侍長、岩倉爵位局長其ノ他侍從職等參列ス。天顏咫尺、則チ授爵ノ書ヲ賜フ。式全ク終ハリ、兄弟相携エテ小石川家大兄ノ邸ニ歸ル。後チ二日祖先ノ祭典ヲ執行シ、賜爵ノ旨ヲ申告シ、祝宴ヲ開ラキタリ。余大政維新ノ始メニ當リ、別ニ一家ヲ興シ官ニ在ル。茲ニ殆ント三十年草奔ヨリ起ツテ今此ノ官位榮爵ヲ有シ、又貴族院議員ニ勅選セラル、ノ光榮ヲ受ク。抑天恩ノ優渥ニ出ルト雖トモ、亦父祖ノ餘慶ニ依ルニ非サルヲ得ンヤ。後チノ子孫勉メテ益國家ニ忠誠ヲ盡スヲ忘スル可カラス。茲ニ授爵ニ関シ、賜フ所ノ書ヲ左ニ載ス。

一 特旨ヲ以テ華族ニ列セラル。

二 依勲功特ニ授男爵。

三 今般依勲功被列華族候ニ付、特旨ヲ以テ帝室御資産ノ内、金壹萬圓下賜候條家門保續ノ目的可相立、右奉勅旨相達候事。

四 今般華族ニ列セラレ候ニ付、家門永續費トシテ下賜候金額ハ軍事公債証書ヲ以テ下附候條、御旨意ヲ奉シ世襲財産ヲ構成

シ、永久保存ノ道相立可申事。

同年七月次男圓工科大學卒業、工學士ノ稱ヲ受ク、故アツテ分家シ別ニ家ヲ興ス。同年九月一日、庶子三女千代生マル。同年十二月千代故アツテ筑前國鞍手郡直方町貝鳴太助ノ養女ト成ル。

明治三十年一月十一日、皇太后陛下崩御ス。英照皇太后ト奉稱ス。舉國臣民哀悼極マリナシ。國喪ニ服スル滿一年、余官務ヲ以テ東京ニ在リ、參内天機ヲ伺フ。同年二月八日ヲ以テ英照皇太后大喪ノ典ヲ京都ニ於テ舉行セラル。有栖川威仁親王殿下大喪使タリ。又天皇陛下ノ御名代タリ。京都ノ自邸ヲ以テ大喪使宮殿下ノ御旅館ニ供セラル。余鳳輦ニ先タチ二月三日、京都ニ歸リ專ハラ御旅館ノ準備ニ從事ス。同五日、鳳輦京都ニ着御。大喪使宮殿下、其ノ他百官有司大禮服供奉、余モ亦列内供奉ノ榮ナ辱フス。停車場ヨリ整列順路京都御所ニ鳳輦ヲ進メラル。鳳輦ノ過クル所家々窓戸ヲ閉チ黒布ヲ以テ掩フ。道路ノ兩側ニハ陸海軍隊、諸學校職員生徒、京都市及ヒ遠近ノ臣民充滿、鳳輦ヲ拜迎ス。衆人哀惜仰キ見ル者ナシ。鳳輦御所ニ着御、衆人ニ暇ヲ賜フ。大喪使宮殿下御旅館ニ御着。余門外ニ奉迎ス。其ノ夜家族一同ニ拝謁ヲ賜フ。又天皇陛下ヨリ殿下ニ賜フ所ノ酒肴ヲ分賜セラル。亦光榮ト謂ツ可シ。二月八日、大典舉行ノ當日ニ至ル。朝未寒威凜烈天曇リ雪ヲ催ス。午後六時列内供奉ノ諸員ニハ、各大臣ヲ始メ勅任官、公侯爵其ノ他有爵有位帶勲者各差等アリ。貴衆兩院議員列外ノ供奉員ハ大約泉湧寺ニ先着ス。定刻ニ至リ天晴ル。陸海軍隊、列内供奉ノ先頭タリ。列内供奉ノ諸員皆ナ徒歩整列ス。鳳輦ヲ牛車ニ奉駕シ、錦旗數流騎兵鳳輦ノ前後ヲ警衛ス。仙洞御所御出門肅々トシテ順路ヲ奉送ス。拜觀人幾十萬、其ノ數測カリ知ル可カラス。其ノ式典行列ノ盛大ナル、真ニ我國古今無比ナル可シ。以テ聖德ノ偉ナルヲ恐知ス可キナリ。鳳輦堺町御門ヲ出、堺町通りヲ南エ、三條通り東エ、寺町通りヲ南エ、五條通りヲ東エ、五條橋ヲ渡御、伏見街道ヲ南エ午後九時半夢ノ浮橋着。茲ニ牛車ヲ撤シ、鳳輦ヲ輿丁ニ移ス。同十時半泉湧寺ニ着。少時休憩稍アツテ供奉ノ諸員式場ニ參列ス。零時祭典始マリ、翌午前一時半式全ク終リ、參列諸員拜禮退散ス。余等午前三時自邸ニ歸ル。有栖川大喪使宮殿下ニハ、祭典後御埋棺等ノ式ニ臨マセラレ、翌九日午前十一時御歸館アラセラレタリ。殿下ハ五日御祭典ヲ終ルマテ京都ニ止マラセラル。余ハ帝國議會開會中ナルヲ以テ御暇ヲ願ヒ、同十一日再ヒ東京ニ至ル。同年三月四日、有栖川大喪使宮殿下御歸京、之レヲ新橋停車場ニ奉迎シ、復タ御殿ニ伺候ス。殿下親カラ銀製御紋章莢器ヲ紀念ノ為メトシテ下

賜セラル。又京都御発途ニ臨ミ、家族ニ拜謁ヲ賜ヒ、金圓并ニ御物ヲ下賜セラレ永ク一家ニ秘蔵セリ。同年三月十七日ノ夜、余俄然顔面神経麻痺病ニ罹リ、左半面運動神経ノ作用ヲ失フ。醫學博士三浦金之助ノ診断ヲ受ケ、電氣治療ヲ施ス。同月二十三日、東京ヲ発シ縣ニ歸任ス。病痾容易ニ癒エス、専ハラ眼口ノ官能ヲ侵サレ、書見并ニ言語ニ困シム。依ツテ退官静養セント欲シ、同年五月四日、辞表ヲ呈シ退官ヲ請フ。此ノ時地方長官ニ大更迭アリ。時ノ内務大臣樺山伯、論スニ静養勤續ス可キヲ以テス。誣ユル能ハス。請暇京都ニ歸リ、病院嶋村醫學士ノ治療ヲ受ク。留マル五旬病ヒ少シク癒エ、七月三日、任地福岡ニ歸ル。同年八月十四日、仲兄林有造君ノ急電ニ接ス。豈ニ圖ラン北堂病氣危篤ノ凶報ナリ。愕然一時神氣ヲ失フ。急ニ行季ヲ収メ歸省セントス。次ヒテ又電報アリ。北堂遂ニ起タス、午后一時永眠セラルト。悲哀止ムナク即時福岡ヲ発シ、門司港ニ出乗船、伊豫三ヶ濱ニ至リ、船ヲ更エ宇和嶋ニ着。又別船ニ移リ同十八日拂曉、土佐宿毛村ノ片嶋ニ着ス。里程僅カニ三百海里ニシテ、日數五日ヲ費ス。其ノ不便推シテ知ル可シ。来迎諸人ト共ニ令兄林有造君ノ邸ニ至ル。余慶應三丁卯ノ歲國ヲ出、今ヲ去ル三十有一年舊識ノ山河依然タルモ、市街荒廢又昔日ノ觀ナシ、焉ソ今昔ノ感莫カル可ケン哉。令兄門ニ迎フ、互ニ暗涙黙々坐ニ就ク。親戚知友貴極ヲ繞リ坐ス。余先ツ諸人ニ對シ久濶ノ禮ヲ正ス。令兄徐ロニ語ツテ曰ク、嗚呼悲ヒ哉北堂始メ感冒ノ微恙ニ罹ラレ、須臾ニシテ輕快、又更ニ輕少ノ下痢ヲ起シ、熱度共ニ進ミ、少シク衰弱ノ兆候ヲ顯ハス。荏苒五日藥湯滋養怠リナカリシモ、熱氣益昂騰、遂ニ病ヒ肺炎ニ變シ、衰弱益加ハル。近日暑熱ノ激甚ナル壯者ト雖トモ、猶ホ能ク堪エ難シ。況ンヤ八十有七ノ高齡何ソ能ク凌キ得可ケンヤ。然レトモ精神明確毫モ痛苦ノ状ナク、藥飼時ヲ欠カス、十四日ノ朝ニ至リ熱度大ニ減シ、頗フル爽快ノ状ヲ示ス。臨終一時間前ノ如キ。鷄卵及ヒ熱飯ヲ食スル、聊カ常時ニ異ナル事ナシ。而シテ俄然形成一變眠ルカ如ク逝ク。真ニ哀惜ニ堪エサルナリ。然リ而シテ北堂ノ德遠近ニ普ク。其病褥ニ就クヤ、一郷舉ケテ恙ナキヲ祈ル。親戚故舊ニ在ツテハ日夜看護怠リナシ。又不幸中ノ幸ト謂フ可シ。汝チ少シク心ヲ安ンセヨト。余之レヲ聴キ涕淚止マス。則チ柩前ニ進ミ謹ンテ神靈ヲ拜シ、撫育教養以テ今日ニ至ル、無限ノ鴻恩ヲ謝ス。且ツ兄弟互ニ舊時ヲ追想シ、母公ノ德行家政ノ整理等交々談シテ盡キス、聞ク者嘆稱セサルハナシ。同二十日、神式ヲ以テ東福寺山ノ墓地ニ葬ル。會葬スル者數百、儀式最モ盛ンナリ。亦光榮ト謂ツ可シ。二十日祭ヲ終エ、除服ノ通知ニ接ス。余去ルニ臨ンテ小學校工金百圓ヲ寄附ス。九月三日、宿毛ヲ發シ宇和嶋・八幡濱等ヲ

經、豊後日出ニ上陸。同九日福岡ニ歸任ス。同年十一月二十八日、庶子長男健造ヲ小倉市士族竹腰虎太郎ノ養子ニ遣ハス。

明治三十一年二月一日、神苑會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

神苑會福岡縣委員總長ヲ囑託ス。

同年二月十九日、豊國會長ヨリ左ノ書ヲ贈ラル。豊太閣三百年祭舉行ノ事業ヲ賛成シ金圓寄附セラレシニ依リ銀小瓢ヲ贈與ス。

同年二月二十五日、大日本帝國水難救濟會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

大日本帝國水難救濟會福岡縣委員總長ヲ囑託ス。

同年四月十二日、日本赤十字社總裁宮殿下ヨリ左ノ賞ヲ贈與セララル。

爰ニ從三位勲三等男爵岩村高俊氏社事ニ盡力セラレ、其ノ功績顯著ナルヲ以テ本社有功章社員章條例ニ據リ、上奏裁可ヲ經テ有  
功章ヲ贈與ス。

同年四月十六日、大日本水産會會頭宮殿下ヨリ左ノ委囑ヲ受ク。

水産會擴張福岡縣委員長ヲ委囑ス。

同年四月二十三日、大日本水産會會頭宮殿下ヨリ左ノ賞ヲ贈與セララル。

本會務ニ盡瘁シ、水産上裨益スル事大ナルヲ認メ、茲ニ大日本水産會綠色有功章ヲ贈與シテ其ノ功勞ヲ表彰ス。

同年五月十三日、二女勝子岐阜縣大垣士族那波光儀長男光雄ト結婚ス。

同年五月十四日、廣鳴縣知事ニ任セラレ、高等官一等ニ叙セラル。余上京中轉任ノ命ヲ受ケ、同月二十五日、東京ヲ発シ京都ニ至リ、茲ニ元廣鳴縣知事浅田德則ト相會シ、要件ノ引継キヲ受ケ、浅田ハ任地神奈川縣ニ向ヒ出發シ、余ハ六月一日、京都ヲ發シ、同日午后四時半廣鳴市松原停車場ニ着ス。書記官榊原以徳、警部長西田栄太郎、其ノ他陸海軍將校、裁判官、諸學校職員生徒、縣市會議員等未リ迎フル者多シ。旅館長沼鷺藏方ニ投ス。同二日榊原書記官ト共ニ縣廳ニ出、縣政ノ引継キヲ受ケ各部各課ヲ回視ス。

廣鳴縣ハ安藝・備後兩國ヲ管轄シ、戸數三十三萬餘戸、人員百三十五萬餘。國税金二百十萬餘圓ヲ収メ、本縣モ亦地方大縣ノ部



ニ屬ス。市二個所、廣嶋・尾ノ道トス。舊藩ハ廣嶋・徳山。廣嶋ハ浅野侯ノ城址ニシテ、第五師團、廣嶋控訴院等アリテ、中國ノ一大都會タリ。又江田嶋ニ海軍兵學校、呉ニ鎮守府アリ。同年五月十八日、大日本水難救濟會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。大日本帝國水難救濟會廣嶋縣委員總長ヲ囑託ス。

同年五月二十五日、大日本武徳會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

大日本武徳會廣嶋縣地方委員長ヲ囑託ス。

同年同月同日、神苑會總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

神苑會廣嶋縣委員總長ヲ囑託ス。

同年五月二十七日、日本赤十字社福岡支部長囑託中、社行擴張ノ為メ尽力少ナカラサル旨ヲ以テ謝状ヲ賜フ。

同年同月同日、日本赤十字社總裁宮殿下ヨリ左ノ囑託ヲ受ク。

日本赤十字社廣嶋支部長ヲ囑託ス。

同年六月三日、廣嶋ヲ發シ事務引継キノ為メ、福岡ニ趣ク。翌四日福岡ニ着シ、五日縣廳ニ出、新知事曾我部道夫ニ縣務ノ引継キヲ了ス。官民送別ノ宴ヲ催サントス。余固辞ス。代ルニ物ヲ送ラル。余金五十圓ヲ福岡教育會ニ寄納シ、別ヲ告ク。六月十一日、福岡ヲ發ス、官民未送スル者多シ。其ノ日直方町貝嶋氏邸ニ投ス。一泊去ツテ小倉町竹腰氏ニ至リ宿ス。同十三日、行橋町柏木氏ノ別宴ニ趣キ泊ス。同十四日、柏木氏ヲ辞シ門司ニ致リ、久良知虎次郎氏ノ饗宴ヲ受ケ福岡・直方・小倉・門司等ヨリ未送スル人ト共ニ馬関ニ渡リ、更ラニ大吉樓ニ於テ、貝嶋氏ノ饗應ヲ受ケ一泊。同十五日、衆人ニ別ヲ告ケ中國通航船ニ投シ、三田尻ニ上陸、同所一泊。同十六日、山陽鐵道ニ乗り、廣嶋市許斐停車場ニ着ス。茲ニ衆人ノ未迎ヲ受ケ廣嶋市水主町ノ寓居ニ入り、縣ノ常務ニ服ス。同二十日、呉鎮守府及ヒ江田嶋海軍兵學校等ヲ訪問シ、呉岩村團次郎方ニ一泊。翌日廣嶋ニ歸ル。同二十六日、陸海軍將校、控訴院、地方裁判所等ノ各官并ニ縣市會議員有志者等二百餘名ヲ階行舎ニ招待シ就任ヲ披露ス。同年六月二十七日、地方官會同ノ召集ニ應シ東上ス。此ノ時ニ方リ戦後經營ノ事業トシテ帝國議會ノ操縦頗ル難事ニ屬シ内閣動揺ス。自由・改進黨合シテ一團トナリ、憲政黨ヲ組織ス。伊藤侯爵總理大臣ヲ辞シ、遂ニ内閣ノ總辭職トナリ、憲政黨ノ領袖大隈伯總理大

臣ニ、板垣伯内務大臣ニ任官シ、宮内、陸海軍ヲ除クノ外、各省大臣盡ク党人ヲ以テ任官セラル、ニ至レリ。是レヨリ党人ノ官ヲ望ミ相争フ恰モ蒼蠅ノ残瀝ニ集マルカ如ク、大臣ノ官房魚市場ノ觀アリ。其ノ醜狀見ルニ忍ヒサル者アリ。余病ヲ以テ辞表ヲ呈シ、七月二十日<sup>\*1</sup>、東京ヲ去リ廣嶋ニ歸ル。同年七月二十八日、依願本官ヲ免セラレタリ。同日錦鷄間祇候仰付ラル。則チ縣務ヲ新知事服部一三代理書記官榊原以德ニ引継ギ、同年八月三日、衆人ニ送ラレ廣嶋ヲ発シ、九州ニ遊ヒ、博多・小倉間ニ逍遙、遂ニ小倉ニ一小屋舎ヲ求メ隱棲ノ所トス。之レヨリ京都・小倉間ニ風月ヲ樂ミ病軀ヲ養フ。憲政党中舊自由・改進而党獵官軋轢均衡論起リ遂ニ五ヶ月ヲ出スシテ憲政党内閣倒レ山縣侯爵入テ内閣ヲ組織ス。

\*1 明治三十一年八月十三日、四男尚俊病死。

\*2 同年十二月二十八日、三女恒名古屋市黒川耕作ト結婚ス。

\*3 明治三十二年三月二十日、四女照金沢市彦三五番丁八十二番、今村勇次郎長男次七ト結婚ス。

余慶應三丁卯即チ維新ノ前年國ヲ出、辛ニ此盛世ニ遭遇シ、在官前後二十有五年、其間種々ノ經歷逸事アリト雖トモ、中ニ就キ最モ心思ヲ勞シタル事項ヲ舉クレハ、一、維新東北ノ戦争、二、明治七年佐賀ノ乱、三、伊豫・讃岐兩國ノ改租、四、明治十七年石川縣ノ恐慌是ナリ。

維新ノ戦争ニハ軍監トシテ、佐賀ノ乱、豫・讃ノ改租、石川縣ノ恐慌ニハ皆縣令在官中ナリ。今其梗概ヲ左ニ摘記ス。

一、明治元年、維新東北ノ戦争ニ於テ、其著シキモノヲ舉クレハ、越後小千谷ニ向フ芋坂雪峠ノ戦、長岡ノ要害榎峠ノ戦、片貝塚ノ山ノ戦、與板ノ戦、長岡見附ノ戦等是ナリ。又其最モ心思ヲ勞シタルハ、余ハ尾州藩及ヒ信州各藩ノ兵ヲ卒ヒ、薩・長兩藩ノ兵ト越後口ヲ併進ス。彼ハ統一訓練ノ兵ニシテ、我ハ烏合不熟ノ兵、而シテ我彼ニ劣ラサルノ成功ヲ期ス。故ニ毎ニ陣頭ニ立チ決戦ヲ試シ事ナリ。又小千谷ニ於テ、長岡藩ノ老臣河井繼之助トノ談判及ヒ米澤藩降伏前、藩情視察使トシテ米澤城下ニ派出等ノ事ナリトス。明治二年六月二日、左ノ賞典禄ヲ賜フ。

一、昨年賊徒掃攘ノ砌、軍務勉勵職掌ヲ盡候段、叡感不淺依テ為其賞永世禄高二百石下賜候事。

一、明治七年佐賀ノ乱ニ就テハ聊カ當時ノ状勢ヲ記セスンハ其真相ヲ窺知シ難シ。抑モ前年征韓ノ論起リシヨリ朝議協ハス、要

職ニ在ルノ人去テ故國ニ就キ志士ヲ糾合シ、他日其志望ヲ遂行セン事ヲ期スルモノ、如シ。此ニ於テカ海内ノ人心左支右吾頗ル紛擾ノ形勢トナレリ。其要職ノ人トハ誰ソ、即チ薩摩ニ西郷、長州ニ前原、土佐ニ板垣、佐賀ニ江藤等ナリ。是皆維新ノ功臣、當時ニ於テ有數ノ名士タリ。特ニ西郷ハ拔群ノ大器ニシテ、然モ維新ノ元勳、廟ニ坐シテ聲望衆ニ擢ンテタリ。是等ノ士皆野ニ在リ動スレハ兵ヲ弄シ、政府ニ抵抗セントス。天下ノ人遂巡疑懼其向背ニ惑フモ亦宜ナラスヤ。此ノ時ニ方リ政府若シ悠々機ヲ失ハン欵。大事去リ亦收拾ス可カラサルニ至ル必セリ。蓋シ政府茲ニ見ルアリ、在野者ノ結合未タ成ラサルニ先チ其制シ易キ者ヲ擇ンテ手ヲ下シ、以テ人心ヲ收攬センニ如ストハ在朝三條、岩倉、大久保、木戸公等ノ説ナルカ如シ。廟議略決スト雖モ未タ其端緒ヲ得ス、偶佐賀縣不穩ノ報アリ、政府機ニ乘シ事端ヲ茲ニ起サシメ、以テ天下ノ統一ヲ計ラントス。大兄通俊君佐賀縣令タリ。此時余代リテ該縣令ニ任セラル。而シテ如上ノ顛末ハ余既ニ之ヲ知ル、畜ニ之ヲ知ル而已ナラス、此ノ措置ヲ以テ大ニ策ノ得タル者トシ、内務卿大久保公ニ就キ、余カ計圖ヲ獻ス。政府悉ク之ヲ允ス、即チ特ニ兵ヲ卒ヒ任地ニ赴ク、恰モ火中ニ油ヲ濺クカ如シ。凶徒忽チ蜂起砲烟四方ニ舉ル。籠城三日、衆寡敵セス。矢石ヲ冒シテ退ク。銃丸外衣ヲ貫ク二個、後チ大兵ノ至ルニ及ンテ一舉回復、巨魁江藤等誅ニ伏シ、天下ノ人心僅カニ定ル。後チ賞ヲ賜フ、二回左ニ記ス。

一、佐賀縣凶徒嘯聚ノ報ヲ聞キ速ニ赴任。暴烟ヲ避ケス説諭ニ及候處却テ彼ノ襲撃ニ逢ヒ、困難ニ罹リ候段、苦勞ニ被思召候。依之為慰勞酒肴下賜候。 明治七年二月廿八日

一、佐賀縣暴動ノ際速ニ赴任。艱苦勉勵功勞不少、依テ為其賞金七百圓下賜候事。

明治九年四月六日

余熟々當時ヲ顧ミ其變遷推移ノ状ヲ以テ之ヲ今日ニ觀察スルニ、佐賀ノ乱ヲシテ彼ノ時ニ誘發セシムル事ナク、荏苒日ヲ送り緩慢時機ヲ誤ル時ハ、薩長土肥併ヒ起リ、海内擾乱遂ニ政府顛覆ノ危殆ニ陥ルヤ亦測リ知ル可カス。幸ニ氣勢ヲ未漸ニ摧キ、薩長ノ兵乱ヲシテ分起セシメ、土佐ノ如キハ之ヲ未發ニ制スル得タル等、其謀略ノ成功シタルハ、誠ニ國ノ幸福ナリトス。若シ夫レ然ラスシテ彼等志ヲ得、朝ニ立チ國政ヲ握ランカ。亦忽チ反動、長ク國家ノ平和ヲ害シ、國運ノ發達今日ノ如キニ至ル、恐ラクハ保シ難カラン。此ニ於テ欵、政府ノ果斷能ク其機宜ニ適シ、隨テ余カ犠牲トナリ、國家ニ貢獻シタルノ微志モ亦、多少ノ功ナキニ非サル莫ラン欵。

一、豫・讚兩國改租ノ事タル一縣ニシテ豫ハ重ク、讚ハ大二輕シ。其平準ヲ得セシムル、是改租ノ主眼タリ。茲ニ於テ勢ヒ讚ノ租額ヲ増加セシメサルヲ得ス、是レ農民ノ痛苦容易ニ受諾スル事能ハサル處、或ハ哀願トナリ、或ハ強訴、遂ニ席旗ヲ翻サントスルニ至ル數次、此ノ時ニ當リ余身ヲ挺シテ日夜四方ニ奔走、或ハ叱咤、或ハ諭示、三年ノ歲月ヲ費シ、漸ク愛媛縣改租ノ業ヲ了スルヲ得タリ。其時詩アリ聊カ現状ヲトスルニ足ラン。

塩飽醬液引田糖 一國甘酸子細嘗 寄語痴農若嚇我 從容不避竹尖槍  
後千左ノ賞ヲ賜フ。

一、愛媛縣令奉職中地租改正事務勉勵候ニ付、為其賞白縮緬三疋下賜候事。

明治十四年八月六日

一、明治十七年石川縣ノ恐慌タルヤ、政府紙幣増發ノ餘毒ニシテ、國內一般其害ヲ免カレサリシモ、就中石川縣ノ恐慌ヲ以テ最モ甚シトス。斯ハ元百萬ノ大藩、後ニシテ士民常ニ餘裕アリ。維新後銀行會社勃興シ、恐慌ノ當年ニ在リテ、縣下其數三十六ト稱ス、皆預金ヲ以テ業ト為セリ。其中加・越・能三州ノ富豪ヲ以テ成リタル者ヲ北陸銀行トス。旧藩以未ノ設立ニシテ上下共ニ信用厚シ。而シテ其内部ハ早ク既ニ頹敗セリ。加ルニ此ノ恐慌ニ逢ヒ、忽チ破綻停業スルニ至リ、他ノ會社銀行モ共倒シ、士民ノ狼狽大方ナラス。或ハ狂シ、或ハ憤怒、投水、自刃等ノ変死者日トシテ警察ノ報ニ上ラサル事ナシ。其甚シキニ至リテハ、凶器ヲ以テ暴行スル者アルニ至ル。其慘狀見ルニ忍ヒス。此ノ時ニ方リ縣下ノ士民屢救濟ヲ哀願シ未ル事態此ノ如シ、何ソ傍觀スルヲ得ン。茲ニ於テ縣下ノ有志ニ示詢シ、先ツ其重要ナル北陸銀行ヲ救濟セントシ、其負債資産ヲ調査セシメタルニ、預金二百萬円餘ニシテ、負債百ニ對シ資産二ニ過キス。斯ノ如キ難件何ヲ以テ整理スルヲ得ン。再三謝絶スルモ猶ホ悲願シテ止マス。遂ニ自カラ東上シ、政府并ニ前田家ニ就キ事ノ容易ナラサル狀況ヲ具申シ救濟ヲ依頼ス。政府前田侯共二人ヲ派遣シ、現状ヲ檢セシムルニ至ル。爾後再三東上救濟ノ方法ヲ設ケ、終ニ政府及ヒ前田家トノ救濟金ヲ受ケ、銀行ノ資産、且ツ重役株主ノ私財ヲ集メ、漸ク百ニ對シ二十五ノ割合ヲ以テ辨濟セシムルヲ得、事始メテ落着ス。時人大ニ余カ勞ヲ徳ト為セリト云。

(國學院大學図書館司書・調査課長 磯貝 幸彦)

(國學院大學図書館司書 古山 悟由)